

41548

教科書文庫

4
810
41-1923
20000 50944

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

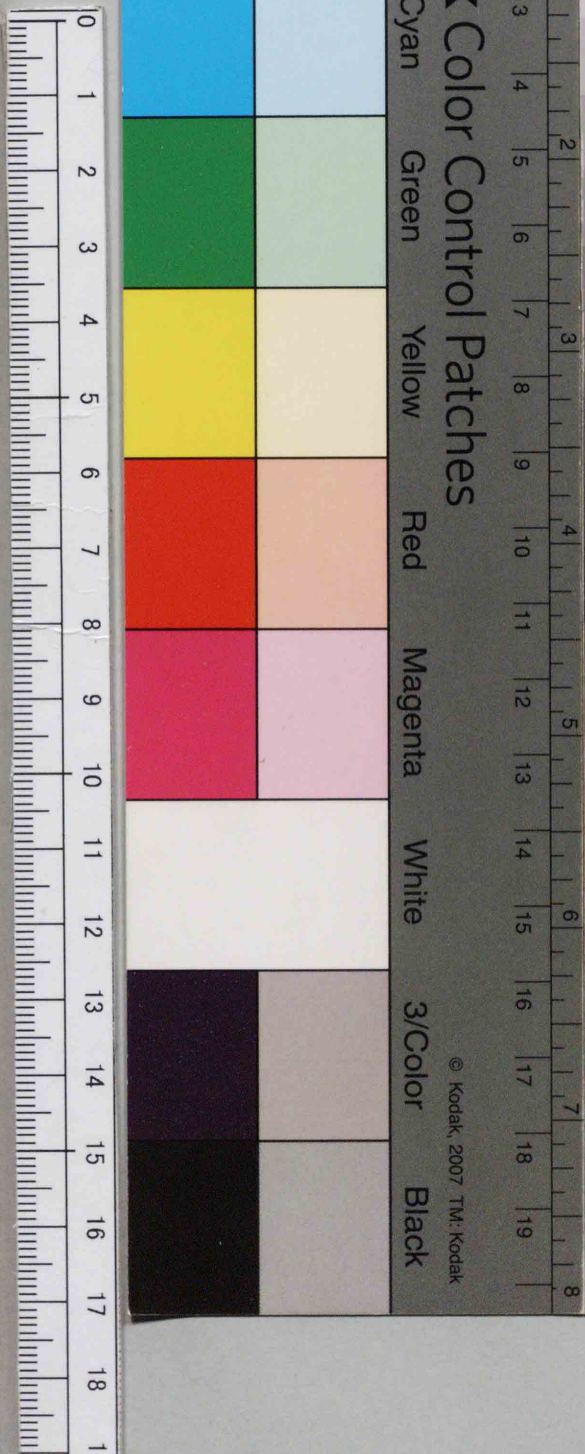


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



375.9  
Fu 10  
資料二

國文新讀本 卷六



375.9  
Ful0

資料室

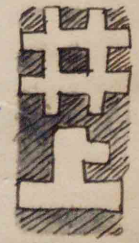
文部省檢定濟

大正二十一年十月二十七日 中學校國語教科書

東京帝國大學教授 文學博士 藤村 作  
東京帝國大學助教授 文學士 島津久基 共編

# 國文新讀本

## 東京 至文堂



### 國文新讀本 卷六

#### 目次

- 一 自然と我が國民性……………藤岡作太郎……………一
- 二 近古佳調(和歌)……………一〇
- 三 童心……………北原白秋……………三
- 四 汝は偉大なり韻文……………人見東明……………二
- 五 正直であれ……………吉田絃二郎……………三
- 六 大風雨……………鹽井雨江……………六
- 七 大鳴門のながめ……………久保天隨……………三
- 八 短き手紙(書牘)

目次

	(一)	痒からう	正岡子規	四
	(二)	虫食ひ栗	正岡子規	四
	(三)	涼しき雨	松根東洋城	四
	(四)	土筆	岡本松濱	四
九		山の木と大鋸	志賀直哉	四
一〇		親	里見 弴	五
一一		名君	菊池 寛	五
一二		佛法僧	高濱虚子	七
一三		小松原 (一)	坪内逍遙	八
一四		小松原 (二)	小松原の他の一部	八
一五		小松原 (三)	小松原附近の鎮守の社	九

一六		龍の口	笹川臨風	一〇
一七		徒然草より		
	(一)	石清水		一四
	(二)	和漢朗詠集		一五
	(三)	もろ矢		一五
	(四)	高名の木のぼり		一六
	(五)	佛問答		一七
一八		國民性と其の訓練 (一)	野田義夫	一八
一九		國民性と其の訓練 (二)		二六
二〇		逆鱗	(源平盛衰記)	三三
二一		詩人西行	藤岡作太郎	三六

二三 晩春の別離(韻文)……………島崎藤村…一四

二三 鳳凰堂……………谷崎潤一郎…一四

卷六目次終

國文新讀本 卷六

文學博士 藤村 作  
文學士 島津久基 共編

一 自然と我が國民性

國民の特性は、初よりその人種に固有なるものもありと雖も、またその住處の地勢・氣候によつて馴致せられ、變化したるものも少からず。そのもと同じき印度歐羅巴種族が東洋に、西洋に相分れて、寛猛柔剛匹を異にする種々の國民

と成りたるは、南國の日、北地の風、山海さまさまの風物が、これを養ひたるなり。日本國民が全一體としてよく統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接する國なき、その地位に影響せられしこと少からざるべし。

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲に於ける以太利、瑞西の如し。氣候中和にして、山水明媚、瘴烟毒霧の襲ふことなく、猛獸毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原、眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流數百里の山野を浸すを見ず。雄大瑰偉なる大陸的風致に乏しと雖も、至るところ優麗爛雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし、富士を後にして、長汀曲浦、浪靜かに砂滑かなり。瀬戸内

海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日・夕日に移らふ景趣は應接に暇あらず。陽春櫻あり、晚秋菊あり。初夏の梢にかゝれる藤波は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、季冬の森、鶉の聲暗き蔭に、紅の椿は拾ふ兒なしに切り落つ。美なるかな山河、これに接するものは怒れる心も和ぎ結べる思も解けて、愛賞に他事なきを得ず。山川は優美なり、穩和なり。これに馴れ、これを愛する國民が、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化の致すところなるべし。日本の土地は孔雀を生ぜずして、雉子を産す。國民の性もまた孔雀の姿の如く濃艶ならずして、雉子の如く淡泊なり。悲憤の情時には火の如く燃ゆる

ことありと雖も、概するに稟質猛烈ならずして穩健に、執著せずして洒脱なるも、また外圍の風物が漸次に養ひ來れるものならんか。

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豐饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫和なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接するものはこれに親しみ、親しむものはこれを慕ふ。愛に迎へらるるものは、愛に酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、その一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足

らず、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそ、カンテラの光に映えて、水々しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り、庭に植ゑ込む。裏長屋の道具の据ゑ所もなき窓前にも、稗蒔を作りて、田舎の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育てて、やさしき野趣を嬉しむ。長火鉢のわきの福壽草は鏡餅に對して暖げに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて、自然を愛すること此の如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、恐るべきを思はず。野をも垣をも吹き亂す二百十日の風も、野分の名に優しく、峰をも谷をも

徒然草しきわのし恐ろ  
しきわのし  
りや床とさいへばしくくなばぬ。

一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやび  
やかなり。荒き猪も臥猪の床と稱ふるにやさしく聞ゆな  
ど兼好がいへるは、我等の自然に對する態度を説明せるな  
り。雨といへば照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の  
降りも十日の照りより飽きくするに、卯の花くたし、時雨  
など、何れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表る  
るのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふることあり。  
文學には、源氏物語の卷の名に、夕顔、末摘花、葵、神朝顔、胡蝶、螢、  
常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等の類多く、これより源氏名の  
稱は起れり。我等はまた日常の用品にも、自然より出でた  
る名を用ふ。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など

枚擧するに暇あらず。今の煙草にも福壽草、白梅、臯月、あや  
め、萩、紅葉等あり。古くは獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に  
譬へいひしもやさしからずや。斯くの如き類は指を屈す  
るに隨つて想ひ出づべく、いづれも國民の自然を昵愛ニヒク愛スする  
ことを示すものならざるなし。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よくこれを尊重せり。  
尊重するものには悦んで服従す。彼等は漫に人工の手を  
加へずして、自然のまゝに自然を仰ぐ。この服従を以て屈  
伏といふ勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈  
伏するものは不平なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如  
く、悦服するものは從順なる兒孫が寛仁寛仁なる家長を見るが

如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意となす。花を愛する趣味の我等がいかに西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峰に亘り、川に沿ひて雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もそのままに、願はくはこれに置ける朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて、歡興を助くるに、一は床上の盆石・盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣

なるを賞すること、恰も油繪と水墨繪との異なるが如し。同じ菊を見るにも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチウリツプ・ヒアシンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼には毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、その花に何の美はしきことかある。されど、あるかなきかの黄色を捧げて、なほたよたよと下蔭の蟲の音にもゆらくさまますほの色はやがて白くほゞけて霧に濡れ、風に靡く趣は、我等が胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり、直ちに自然の懷にわけ入つて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自



然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ我が國民の特性なり。  
(藤岡作太郎)

二 近古佳調 (和歌)

我こそは新島守よ、隱岐の海の  
後鳥羽天皇

荒き波風心して吹け。

寢覺して聞かぬを聞きてわびしきは、  
藤原家隆

荒磯波のあかつきの聲。

天の戸をおし明け方の雲間より、  
後京極良經

神代の月の影ぞのこれる。

吉野山花のふる郷あとたえて、

空しき枝に春風ぞ吹く。

春の夜の夢の浮橋とだえして、  
藤原定家

峰にわかるゝ横雲の空。

旅人の袖吹きかへす秋風に、

夕日さびしき峯のかけはし。

霞立つ末の松山ほのぼのと、

藤原家隆

波にはなるゝ横雲の空。

大海の磯もとどろに寄る波の、

源 實朝

われて碎けてさけて散るかも。

武夫の矢なみつくろふこての上に、

霰たばしる那須の篠原。

なこの海の霞の間より眺むれば、

後徳大寺實定

入日を洗ふ沖つ白波。

身にかへて思ふとだにも知らせばや、

後醍醐天皇

民の心の治めがたさを。

聞きわびぬ八月長月長き夜の

月の夜寒に衣うつ聲。

百舌鳥の鳴く尾花が末の夕日影、

頼 阿

のこるも淋し秋の山里。

三 童 心

聖心は童の心である。

越後の良寛禪師は殊に此の童心の持主であつた。斯ういふお話がある。

一に童男、童女、二に手毬、三にお弾きこれが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供達と遊ぶ事がまたどんなに嬉しかつたかが思はれて、ほれぼれする。

その良寛様も子供達には随分馬鹿にされて、盛んに愚弄られたり、擲掬れたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一所懸命に遊び惚れてゐた良寛様があり難い。

或時、例の通り、子供達と隠れんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、「もういゝよ」といふ可愛い聲を一心に待受けてゐられる。と、丁度日の暮れ時で、子供心の何かな欲しくなる時である。家々の燈がちら／＼と點き出すと、子供達は急に遊を止めて、一人残らず、こそ／＼と歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛様も何もうつちやらかしである。無論、幾ら待つても、「もういゝよ」といふものはない。その内に日が暮れ、長い夜が來た。さうして、とうとう夜が明けてしまつた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿した儘、「もういゝよ」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。

その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。  
それから、また或時のことである。良寛様が今度は隠れる事になつた。そこで見つけられては大變だといふので早速田圃の稻叢の中にもぐり込んで、それは可愛らしいことだ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠見たいに頭からすつぽりと稻藁を被つて、おどく／＼してゐられた。すると、子供達はまた例の通り一人残らず、こそ／＼と歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存じない。また日が暮れて夜が来て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝の日が登り始めると、百姓がやつて来て、何の氣もなく、稻束を矢場やばにはづすと、おやつと驚いた。良寛様

が小さくなつてもぐつてゐられる。「おや、良寛様が」といふと慌てて、そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

その心のあどけなき、ありがたき。まるで子供である。

また或日のことである。その良寛様が男の兒や女の兒達とお弾きをしてゐられた。沙門良寛傳に「禪師頗る大勝を博して賭物の熬豆を多く得。」と書いてあるから、餘程の乗氣であつたらしい。丁度其の時誰かが入つて來た。そして、「おや、良寛様なか／＼あなた様はお弾きがお上手で。」と褒めると、罪がないこと、良寛様はぼうつと面を赤くすると、まるでおぼこ娘見たいに、さも／＼恥づかしさうに、そ

つとその熬豆を膝の下に押隠したといふ。その心の初々しさ。そのきまりのわるさ、恥づかしさは全く佛の前に子供らしく、おとなしく、身を遜る心である。尊い聖心は凡てこの童心を源にする。

禪師が如何に天真爛漫であつたかといふことを、もう一つお話する。

或時、赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供が一人泣いてゐた。良寛様を通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭を撫つてやると、あの柿が食べたいといふ。よし／＼それではわしが取つてあげる。泣くんでな

いぞといひながら、やつとこさと木の上に匍ひ上つた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐる内に、それは全くうまさうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの、良寛様は夢中になつて噛るは噛るは、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうに、むしや、むしやと食べ惚れてゐる。下にゐる子供こそ哀れである。それを見て火のやうに泣き叫ぶと、始めて良寛様氣がついた。さあ、しまつた、これはといふので、慌てて枝を揺つたといふ話。思つてもその慌て方のかしき、罪のなき、真正直さ。その子供らしさ。全く涙が零れるほど嬉しいではないか。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔からその儘である。それは何ものにも代へ難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親から酷く叩かれたのでつい上目をした。そこでまたく叩かれた。「親を睨むやうな奴は鰈になるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、ある濱邊の岩の上に、悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。「榮坊どうした。」といふと、榮坊曰く、「おらまだ鰈にならねいか。」鰈になるといはれたので、ほんとに鰈になると思つて、一

心に海を凝視めてふるへてゐた童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。

(北原白秋)

#### 四 汝は偉大なり

風は凧ぎ、  
帆は菱み、  
船は動かぬ  
海の上。

「まゝよ」と、  
我は大の字に  
寝そべりて、  
空を見る。

空は高し、

海は深し、

こゝに小さき

人二人。

一人は海を見、

一人は空を……

かくて語らぬ

小半時。

「おい深いぞ。」

「高いぞ空は。」

「そして僕等は

小さいぞ。」

言ひ終らぬに、

自然の恐ろしさ

身にしみて

わななき、かい抱きぬ。

波にゆれゆる

船の中、

を暗き、深き溜息の

淋しさに堪へ難し。

(八見東明)

### 五 正直であれ

「正直であれ。」とは、誰もいふ言葉である。自己に正直であれといふことも、可なり言ひ古された言葉である。正直であることは、即ち自分の魂を生かして行く唯一つの正しい道である。

正直であることには非常な勇氣を必要とすることも覺悟しなければならぬ。私達は自己に正直である爲に、多くの敵を持つことを恐れてはならぬ。人に憎まれることを

恐れてはならぬ。堂々の戦を恐れてはならぬ。心の弱いといふことは、時として一種の罪惡となる。正しいことの爲に戦ふことの出来ない臆病者は自分の魂を救ふ機會を失ふ。

しかし、考へなければならぬことがある。自己に正直であれといふことは、自分の胸に思つたことを言つてしまへといふことではない。

私は時々「自己に對して正直であれ。」といふことを穿き違へた人々の不快な言葉を聽くことがある。自己に對して正直であると同時に、私達は他人に對する正直を忘れてはならぬ。自己に正直であることは、自己の魂に對する親切

心である。私達は自己の魂に對すると同じ強さの親切心を他人の魂に對しても持つてゐなければならぬ。

謙虚な自分の魂に對して恥づることのない言葉のみが自己に正直な言葉である、純一な素樸な魂そのものさゝやきである。人の悲しみに對して、人の苦痛に對して、そゝがれる涙こそ最も自己に正直な言葉である。

正直な言葉は一時は相手の感情を傷ふことがあるかも知れぬが、必ず相手の魂を生かす。相手の魂を生かさないうやうな言葉は決して正直な言葉ではない。

正直な言葉は一つの概念ではない、また批評でもない。眞理が必ずしも正直な言葉であるとは言へない。眞理が



一度人格を通して表れて来る時、それは正直な言葉となつて響いて来るのである。

たとへ眞理と雖も、濫い人格を通らないで来るものは、正直な言葉となる。

「言ひたいことを言ふ」のが決して正直な言葉ではない。それは最も厭ふべき、憎むべき不正直な言葉である。言ひたいことと、言はねばならぬこととは大分違ふ。

言ひたいことは、どのやうな臆病者も言ふ。言はねばならぬことは、勇氣ある人でなければ言へぬ。

匿名の手紙などを出して、言ひたいことを言ふのは、最も卑怯な人間のやり方である。面と對つて言はねばならぬ

Marcus Aurelius.

\*  
羅馬の帝王、  
哲學者

ことを言つたのは、キリストであり、佛陀であり、マアカス、アウレリウスであり、孔子である。

言ひたいことを言つて、自分の責任を免れようとするくらの卑しい人間はない。彼等は人の魂を傷つけることを喜ぶ卑劣漢である。彼等の言葉は人の魂を傷つけると共に自分自身の魂を亡ぼす。

言はなければならぬことを正直に語るものは、常に多くの敵を持ち、十字架を負はなければならぬ。しかし、その言葉は人を生かし、彼自身の魂を救ふ。

言はなければならぬことを言ふ人の言葉には、自責の念があり、涙があり、感謝があり、同勞者の憐愍がある。私達は

子を打つ親の眼に涙が泛んでゐることを忘れてはならぬ。鞭うたるゝものよりも、鞭うつものの苦痛の更に深く切なることを知らなければならぬ。

鞭うつ者も泣け、鞭うたるゝものも泣け。泣いて共に祈る時、神の國の扉が開かれるであらう。鞭うつものも祝福せられ、鞭うたるゝものも祝福せられてあれ。

正直な言葉はいつも愛から生れて來る筈である。憎から生れる言葉ほど不正直なものはない。  
(吉田絃二郎)

## 六 大風雨

雲のゆききなべてならずもの騒がしく、吹き來る風のをりふし、雨など打交りて、日一日いとおぼつかなくて暮らし、夕つ方より、空のけしきはげしく荒れて、飛ぶが如き雲は、狂へる駒の繩をはなれ、傷つける虎のあれにあるゝが如く、恐ろしさ言はん方なく、雨は横さまにつぶてを打つばかり、風おどろおどろしく鳴りさけびて、梢を折り、垣を抜き、あはれ、ありとある鬼神のひた聚りにあつまりて、天が下を一揉みに揉まんずると見え、ものすごきことものにも似ず。いとすさまじくなれば、雨戸をかたく閉し、かゝる時こそ古の人をと思ひて、日頃好める文を繙き、強ひて讀みもて行けど、魂の身に添はねば、何事とも覺えず。

風いよ／＼猛り立ち、雨ます／＼狂ひて、戸も微塵にならんとすれば、家はゆら／＼とゆらぎで、大海の果、船の上にいる思ひす。風の響、雨の音、募りに募れば、千丈もあらん大波の湧き立ちて、今やうづまく波の底に沈み果てんとするかとあやしまれ、稚き者は泣きまどひ、老いたる者は経誦しなとす。我も心弱くてはと思へば、恐れをの／＼く女子どもに、などさは心弱くやある、小町はあらずや、いみじき歌よますやなど言へど、手足はわな／＼きて見ゆ。

雨戸細目に打開け見れば、ぬは玉のやみにて、あやめも分かず。唯空鳴りとどろきて、何處とも無く人のの／＼する聲は、奈落の底、地獄の果より來るかと思はれて、ものも覺えず。

百萬の大軍ひたよせに寄せ來り、蹄を合はせてさ／＼やかなる庵を駈散らさんとするかと思はれて、幾度か身も慄はれ、百雷の一度に落ちんばかりの音して、天も裂け地も頽れんかと夜一夜、安き心地もせず。曉近くなるま／＼に、吹く風も人心も互に弱り行きて、稚き者も枕に就きなどす。我もいねんとすれど、夢路おだやかならず。

やがてめさむれば、軒端を叩きし雨も音なく、さばかり強かりし風の名残なく空しづまりて、何地にかよへのあらしは吹きたりけんと思はるゝもをかし。梢は大概吹き折られ、木の葉は所せくふりつもり、門も倒れ、築地も崩れ、野邊も庭も一つになり、野寺の軒あらはに見ゆるもあはれなるに、

松の木の大きな根より吹き倒され、柳のみたよ／＼として残りたるは、風にいかなる心のありけん、きかまほし。

(鹽井雨江)

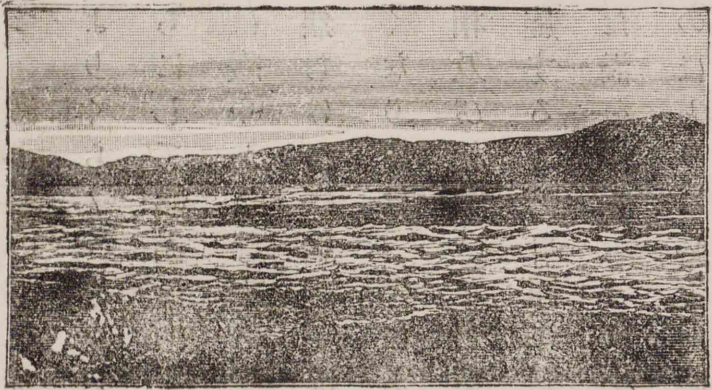
### 七 大鳴門のながめ

そも鳴門といふに二個所あり。こゝなるは大鳴門にして、小鳴門と呼ぶはなほ北に數里をへだてて、北泊のあたりなりとか。さてこゝの海峽には中ほどと覺しき所に、廣さ數百歩なる平巖あり、中の瀬と名づく。これとならびて巨礁數を知らず。かく瀬の巖のつつける處は、水深さまでならねど、その左右は俄に深くなりゆき、奈落の底に通ふかと

疑はれて、百仞にも餘れりとぞ。折しも銀潮みちたふれば、巖どもは沈みて見え分かず。遙に讃岐の山々、小豆島などのかすみで見渡さるゝのみ。瀬より少しく南に離れて、飛島とて殊に大いなる巖あり。形は寶珠の如く、上には松などねちけて生ひたり。こなたの海は扇に似て末廣に開き、阿波の椿の泊、紀伊の日の御崎など、それかあらぬかとはのかに認められ、碧波渺漫としてはてもなく、目に遮るものとは、ほのめく白帆の影のみ。近きあたりには海士の小舟を漕ぎ出でて、藻かり魚釣などするもの多く、こゝの波間には水を潜りてあさる鵜の鳥あらはれ、かしの巖根には翼やすむる鷗さへありて、山輝水映のけしきは、雲なき午天

の陽光に一しほの匂を添へて、打見るかぎり繪にいとよくも似たりけり。もとより形勢のきこえあるこの地のかく風趣はありながら、ただこれのみにては、さして壯觀といふべくもあらねば、今や人々の語り聞えし言の葉も疑はれて、早く潮落ちよかし、渦巻くさまはいかならむなど、眩きつゝ、瞬きもせず、打守りてぞありし。

この時はやく、海山いづくともなく鳴る音して、中の瀬の巖のあたり、潮頭の崩るゝが見え初めぬ。これや退潮の始まりししるしとて、外洋は早く引けども内海は遅ければ、すはやといふ間もあらばこそ、一方は高く、一方は低くなりもてゆきて、瀬戸海の水を傾けてぞこの門に集まり來るなる。



阿波の鳴門の潮流

その疾きことは矢の如く、勢のすさまじきは磐石の轉倒するにもたとふべきばかりにて、鎧巖を洗ひ、戸崎を衝き、更に横に折れてかくは中の瀬よりなだれ落つるなりけり。この轉變は、彈指の間に起りぬれば、拙きわが筆の力に及ばず。なほ打見であるに水準の差は六七尺にもなりて、海峽十餘町の間は全く瀧のさまをあらはし、たとへば、早川の水の網代木にせかれて落つるに異なら

ず。瀨の巖の下なる深淵には、一たび落ちたる潮のまた底よりくらくくと煮えかへりて、さながら鼎の沸くが如く、忽ちにして盤渦を生ず。その大きさ徑三間ばかりと覚え、勢は緩やかなれども、流石に怖ろしげなり。瀧の落つること烈しければ、驚瀾駭浪争ひ騒ぎ、盤渦の中に入るものは跡なくなりゆけど、外にあるものは狂奔馳逐して、後浪と前浪と相及び相闘ひて潮頭を碎き、寄せては返し、行きては走り、輪旋すること百回にして歇まず、遂に中心の凹みとなりて、また渦を作る。こは小さけれども、巻くこと甚だ急にして、そのほとりに必ず逆廻りせるものを作りて、ひたすら轉拗するに似たり。かくて大渦小渦の沸涌するもの數を知らず。

はては互にもみあひもみあひ、かつあらはれかつふたがる。潮のいよ／＼引くに隨ひ、瀨なる巖の尖頂のいよ／＼露はれ來れば、亂濤山の如く襲ひ進み、打越えて輾落し、今は海底鳴動して、千輛の雷車一時に震轟するが如く、地軸も打ちひしがれむばかりなり。碎けては散る波の花、萬顆の泡珠は長空に晴雪を飛ばし、天風潮氣を捲けば巖上の松の梢に颯颯のひびきあり。まことに瀨戸海の潮の息、ただ半里の喉元に逼りて喘ぐなれば、かくなれるも理なるべく、見るさまの壯快にして豪宕なるは、蛟龍も聳駭すべく、鯨鯢も奔蹙すべしとこそ覺ゆれ。まのあたり見る身は慄然として震ひつ。毛髮逆に豎ちて、そぞろ寒きほどなり。ありし小舟ど

もは遙に福良の方に退き、鷗などもいつ方へかかくれぬ。折しも俊鶻一羽、中空を輪に舞ひて、行者が鼻なる高巖の頂に下り、翼を收めて睨視するがありけり。時の移りゆくまゝに、奔潮はます／＼怒りて射注の勢終に止むべくもあらず。下りて飛鳥を衝き、餘流滔々として南に下り、海中明らかに一條の急川を馳せしむ。かの長門の早瀬、周防の大島なども、いかでこれには及ぶべき。われ等は、初の程は、神驚き心死して、面に血の色なきまでになりけるが、漸く自ら蘇り、濶大卓落の感の胸宇を衝くに方りては、豪懷ものたふへきにあらず。舟子に命じて試みにわが舟を渦の中に入れしむ。一葉軽くして水天と抗し、掀

新年の書  
十八日  
下山  
入ロトローリ

簸上下しつゝ、旋るさま、獨樂にひとし。かの大渦に入るれば一分時ならぬに、一旋して終り、小渦に於てするも五分時を出でず。渦の轉拗するにつれて、急川の裡に吐き出され、流されむとすれば、急につと漕ぎ返し、また渦の中に入る。かくすること幾度なるかを知らず。舟子は、舵をとどめて、今はこれ初秋のころにして、觀潮には好き時なれども、三月の大潮には瀧の高さ二間に近く、壯觀心も言葉も及ばぬ計りなり。われ等はよく險に慣れたれば、かゝる折を待ちて、わざと舟を下す。そが汐にひかれて走る様は、さながら飛箭の弦を離れたるが如く、四里の海程も半時ならずして流れ下り、沼島のあたりにつくべしな

ど云ふ。かく云ふ中にも、潮の勢いやまして、いつやむべし  
 ともおもほへず。豪快カウテカイ今は極まりて、悽愴ウツクシの感を牽き、魂魄ウツクシ  
 なみにただよひ、恍惚ウツクシ無何有の境にさまよひて、夢とも現ウツクシと  
 も分かざりけり。

友は忽ちわが肩をたゞきて、おのれ、こゝなる鳴門を畫が  
 かむと、かねてより期せしかど、啻に秋濤のそれのみならず、  
 かゝる壯絶無比の大風景に向ひては、名だたる畫手も筆を  
 捨つべしと思ふなりなどいへば、われ答へて、げにや造化の  
 威靈を極むるところは、人をして意匠を凝らし得ざらしむ  
 るになむ。われかつて立山に登り、室堂の畔に立ちて、劔嶽  
 の峯嶮を仰ぎ、雄鹿にては巖礁の奇をさぐり盡くし、また那

智の飛瀑を觀たりしかど、その度々に恍然ウツクシとしてありし  
 のみ。もとより不世出の神才ならでは、情性ヒメキガの景のために奪  
 はれぬべし。されどかくわれ等の何事をもえせずなれる  
 は、げに絶景のしるしぞかし。前の三所とこの鳴門とは、誠  
 に日東の四大壯觀としてならべ數へまほし。そも水たる  
 ものは、千變萬化して窮まらず、かの橋立・須磨・三保などの如  
 き、汀上の白沙青松と一片の海光とを借りて、すがた粧へる  
 ところどころは、をかしからぬにはあらねど、水は唯微笑む  
 のみ。もし水の變を極めて、怒り狂ふさまを見むとならば、  
 この鳴門に勝るところあらず。されば鳴門を觀ざるもの  
 は未だ水を語るに足らずと、われは、こゝに悟りしぞかし。



今日の如き風日晴美なる折だに、この觀はあるものを、黒風海を掃ひ、雷雨の過ぐる時などには、果していかがあるべきなど云ふ。

さる程に、日もや、西に傾きて、三時頃とも覺しき程になりぬれば、今はとて舟を南に移しぬ。  
(久保天隨)

### 八 短き手紙

(一) 痒からう

啓、一眞一偽、一驚一喜、とう／＼ほんものの疱瘡ときまりて御入院相濟み候由、とにかく安心致し候。唯此の上は氣長く御養生可被成候。御不自由なる事あらば、御申越

可被下候。以上。

寒からう、痒からう、人に逢ひたからう。 子規

(二) 虫食ひ粟

粟有り難く候。

眞心の虫食ひ粟を貰ひけり。

鳴三羽有り難く候。

淋しさの三羽減りけり、鳴の秋。 子規

(三) 涼しき雨

昨着、雨ばかり。 雨や淋大樹

眼前に涼しき雨や杉大樹。

東洋城

(四) 土筆

昨夜は失禮。土筆早速難有存じ候。今灯下に袴を撈りつゝ、幼き春思出でて懐かしく存じ候。

摘草や浪花外れて野路いくつ。

松濱

(俳人の手紙)

九 (二) 山の木と大鋸

蟲が恐ろしかった。小鳥の嘴が恐ろしかった。若芽は伸びた。

今度はナイフが恐ろしかった。枝を切りに来る人が、ちろくと其の邊を見廻しながら通つて行つた。

木は漸く太くなつた。

小鳥が蟲を探しによく来て棲る。今は小鳥は愛らしくなつた。然し鉋が恐ろしい。樵夫が通る。あの腰の鉋でほんくと二度叩かれ、ば自分は胴切にされる。早く太くなりたい。

かう思つてゐる内に又少し太くなつた。鉋は大して恐ろしくなくなつた。然し鋸が恐ろしい。早く大きくなりたい。然し急ぐと危い。細いまゝで伸びると風に折り倒される。

蟲や小鳥に恐れてゐた若芽からは三十年たつた。あと百年たたねば鋸を全く恐れない自分にはなれない。

或日杖を取りに来た男がナイフで自分の肌を Aug 1915 N.S と彫りつけた。消えないやうにと出来るだけ深く彫りつけて行つた。

自分は微笑した。然し、こんな字が肌に残つてゐる内は安心が出来ない。此の彫つた人間が老人になつて死んで、その孫が又老人になつて死ぬ時代が来なければ安心が出来ない。出来るだけ地から精分を吸はねばならぬ。出来るだけ太陽の光を受けねばならぬ。そして出来るだけ伸びて、出来るだけ太くならう。

百年過ぎた。

もういけないと思ふやうな暴風雨に何十度か出遭つた。南へ伸び過ぎた大きい枝を一本折られたが、幸に命にかゝはるほどの傷は受けなかつた。暴風雨は憎らしい。自分は大きい枝を折られた時には随分腹を立てた。然し、成長以外一分一厘自身を動かすことの出来ない自分を、その暴力に對し出来るだけ抵抗少い姿勢にしてくれるものは、やはり暴風雨自身の方だと思ふと、暴風雨に悪意はないといふ氣がして、今は憎めなくなつた。ともかくも、

もう安心だ。

官林拂下げの引渡しに、役人と願人が来た。木は何だらうと思つて上から見下してゐた。彼と同年の隣の木が、

「何しに来たんだらう。」と彼に聲をかけた。

「小さい木がびく／＼してゐるぢやないか。」

「早く行つてしまはないかな。」

「オイ、君の根つこへ立つて僕を見上げながら何かいつてるよ。」

「氣味のわるい奴だな。」

「心配はないよ。」

「オヤ、おれの足を何かで叩いてゐるぞ。」

「ウン、鉋で皮を剥いでゐるんだ。」

「しやうのない奴だな。 Aug. 2015. から。」

「矢立を出して何か番號をつけてゐる。」

「氣味がわるいなあ。」

「ア、歩き出した。歩き出した。」

「今晚吹き降りであると消してくれるんだがなあ。氣持がわるくてしやうがない。」

「何、なんでもないよ。見給へ。大分向うの方の連中も番號を附けられてるぢやないか。」

「さうだね。だがどうして君はつけられなかつたらう。」かういつて隣の木は羨ましさうに彼を顧みた。

一週間たつた。一人の労働者が其の森に入つて來た。暫く其の邊を見廻して、いゝ場所を地ならしし始めた。其の邊の小さい

木を鉋で切り始めた。何處からか熊笹を澤山切つて來た。そして三日程かゝつて其處に小さな小屋を建てた。又三日程すると石と泥で上の丸い小屋程の竈を作つた。願人がそれを見に來た。「おれは此の木もはひるつもりだつたが、役人の奴はこゝまでと言ひ張つたよ。」

「これかね」と労働者は喫みさしの煙管の雁首で番號をつけられずに濟んだ彼を指した。

彼は其の時何か知らず身顫ひを感じた。

「それさ。」

「何、わかるものかね。ついでに切つてしまはうよ。」

「まあ、よせ。それ一本で盜伐で訴へられるとつまらない。」と願人がいつた。

段々に大きな木が切り倒されていった。かまからは晝も夜も烟が立ち登った。それが立ち登らなくなると、二三日して其の中から眞黒になつた切れ／＼な木の死骸が取り出された。それは一まとめにされては傍に積み重ねられて行つた。

遂に彼の隣に立つてゐた木が切られ出した。それは見たことのない非常に大きな鋸だつた。一間ほどの長さで、その兩端に柄が附いてゐた。腰を下した二人が、足を根に踏張りながら、それを挽いた。ズーツ、ズツ、ズーツと靜かに切り進む。その休ない靜かな進行は、其の木の死を一層不可抗なものに思はせた。切り口には三四本の環鐵たがのはまつた檜の楔がさしてある。労働者は時々立つて大きな斧の尻で楔を打ち込んだ。コーン、コーンといふ音は山に響き渡つた。彼の友は從容として一言も口をきかなかつた。彼は嚴肅な感じに打たれた。

幹は一分傾いた。労働者は起ち上つて、靜かに其の場を離れた。呻きと共に木は倒れて行つた。ドーンといふ烈しい地響がした。其の邊の小さい木や草が扇を受けて一度に靡いた。そして、なほ暫くはザワ／＼と騒いだ。

それから二月ほどすると、拂下げられた木は炭になり、或ものは用材又は燃し木として、少しづつ労働者の爲に運ばれて行つた。其の邊一帶は廣々と明るくなつた。小さい木等は不意に日光の直射を受けて歡喜の聲を揚げて騒いだ。日なたでは暮らせない羊齒類は段々に赤く枯れ始めた。

切株が竝んでゐる。彼はそれを眺めながら淋しい氣持になつた。彼には今まで自分のした努力がこれだけで終るものならといふ感情も起つた。最初蟲や小鳥が恐ろしかつた時代から、ナイ

フ。鉋鋸とそれ等が一つ／＼恐ろしいものとして彼の前に現れて来たことを思つた。小鳥を恐れてゐた時にはナイフを知らなかつたことを思つた。そしてナイフを知つて恐れ出した時には、其の上に鉋のあることを考へなかつたことを思つた。鉋の上には鋸があつた。そして總べてを通過したと思つた時に、彼は又更に大鋸といふもののあることを知つた。彼にはもう根氣はなかつた。同時に不安も不満もなくなつた。

然し彼は過去を顧みて、徒勞に歸した其の努力を悔いはしなかつた。徒勞といふ氣もしなかつた。彼には鋸を通過しようとしてゐた時代のおせる氣分は、今は全くなくなつた。そして同時に、大鋸を知る前の少しだらけたやうな安心も、今はなくなつた。それは如何にも淋しかつた。然し、其の淋しさの内に彼は或安定を得た。

(志賀直哉)

一〇 親

干ればぬら土と砂と半分々々の床を見せ、上げきれば、石垣三四段を浸すほどの小川に沿つて、申合せたやうに東北へかしいだ松並木が、自然のまゝ庭さきに取込んであつた。もつくり小高くなつた松の根方には、麥門冬や露などが、昔を語り顔に生ひ茂つてゐたが、そこから縁先まではよく手入れの届いた廣々とした芝生で、樹の間葉の間を洩れた晩春の陽が、鮮やかな明暗の斑を描いてゐた。音ともいへぬほどに葉末が微風に鳴つて、時々はらく／＼と褐くなつたのが落ちて来た。

そこに私は長閑な心持で二人の男の子たちの相手になつてゐた。大きい方がやつと來年から學校といふ齡で、一緒に遊んでやうにも、まだどうにも仕やうのないやうな小さいものたちであ

つた。一人一脚二人三脚、そんなことを教へてみたが、うまくいかないで、餘り面白がらなかつた。

「ぢやア、目隠しをしよう。」

一休してから、ふと思ひついて、今脚を結くのに使つた手拭を、はたはたと振ひながら立上ると、「洋一、鬼になれよ。」

「僕いやア。」

「なせだい。」

「いやア、暗いからいやア。」

「暗い……それア目を結けば暗くなるけれど……ぢやア鉞郎、鬼にならないか。」

「僕もいやだア。」

「そんなことをいつちア駄目だ。ぢア、ぢやんけんほんしよう。」といつたが、氣がつくと、まだその拳の勝負さへわからない彼等だ

つた。それでも掛聲だけは勇ましく、「ぢやんけんほん」と出したの

が、兄は鉞で、弟は石だつた。違つたのに氣がつくと、大急ぎで、弟はむづかしさうに二本の指を伸ばして、同じ鉞に變へてしまつた。

「よし／＼。一番初はパ、が鬼にならう。」

「きり、と目をしばつたが、盲鬼で足でも踏んづけたりするといけないと思つて、兩方から手を把らせ、何處へでもパ、が見當がつかなくなるやうな處へ連れて行つてみるといつて、本所のおいてきぼり」といふ遊びは、それから先どうするんだつたかしらなどと考へながら、子供たちに引つはられて歩き廻つた。

「おや／＼、此處は何處だな。變な處へ來たやうだ。」

などといつてやると、二人は嬉しさうにくつくつと笑つた。

「まだよ。まだ目とつちやアいやアよ。」

廣い芝生の上で、何處へ行つても大丈夫と思ふので、私は勇敢に

潤歩しながら、

「やア、今度は、おうちの方に向いたな。さうだらう。」

「だめよ、見ちやアだめよ。」

「見えるもんかね。……オヤくく、こいつは大變な處へ來たらしいぞ。」

下駄の下に芝生の感覺がなくなつたと思ふと、ごわくくと露の葉が鳴つた。

「こつちく。」

「こつちく。」

大喜びで、ぐんぐん、兩方から手を引つはつた。

「オイく、いやだぜ。川なんかにおつことしたりしちやアいやだぜ。」

その方角には違ひないのだけれど、よもやそんなことをしようと

も、出來ようとも思はないので、口にはさういつても、探り足などは

しずくに平氣で歩いてゐたが、どんく、眞直に行くので、もう一度

「オイ大丈夫かい……」

といひかけた途端に、空を踏んで、はつと思ふと、ボシヤンと水の音がした。勢よく歩いてゐただけ、石垣をずりもしずには、下駄もそつくり穿いたまゝ、腿きりの流の中に、ひよつこりと私は突立つてゐた。何時二人の手を放し、目隠しを下へすつほぬいたか、そんなことの覺えはなかつた。瞬間に私の見たものは、洋一の顔だつた。

何ともかともいひやうのない、一つの深刻なその表情だつた。驚心配後悔謝罪、そんなもののどれ一つでもなく、ただメチャクチャに混亂した、複雑な大人にも見たことがないほどに緊張しきつた表情だつた。一旦は喫驚もしたが、直に眞晝間、しかも春光照々たる下で、着物や下駄のまゝ、川の中に突立つてゐる自分自身の姿を、



狐にでもつまゝれた男のやうに滑稽に感じて、もうちつとで爆發しかけてゐた笑が、それを見るなり、うつと止つてしまつた。その瞬間に私の表情も一變したに違ひない。——ぞつとしたといつてもよいほどの感動を受けたのだから。

「おい、怒つたのでも口惜しかつたのでもなく、變に私の聲にはむきな調子が籠つた、なにするんだい。」

石垣の中途に片脚掛けて、ひよいと跳び上らうとした時

「いやア、いや、いやア。」

とまるで氣の狂つたやうに、洋一は両手を振り廻して打つてかゝらうとしたが、びしょびしょになつた私が、岸に上つて立つたのを見ると、急にわつと聲を揚げて、地べたに伏し倒れてしまつた。

私には凡てよくわかつた。——何が「いや」なのかよくわかつた。

胸に抱き上げた手に、自とぎゆつと力が籠つた。洋一の方でも兩

手で頸玉にしがみついて來た。……私は涙ぐんでしまつた。

「よし、わかかつてる、わかかつてる。何でもありやしない。」

いはれて、洋一は一段聲を張り上げて泣き出した。鉞郎は、さつきから呆氣にとられて、突立つてゐたが、その時これも

「パ、ちゃん。」

と泣き出した。

喜怒哀樂の他の「親」といふ感情で、私ははち切れさうになつてゐた。

(里見 弴)

## 一一 名君

十四代將軍家茂公は、先刻から惡戯ばかりしてゐる。戸川播磨守が懸命に書いた千字文の中の「雲騰致雨露結爲霜」といふ楷書の立派なお手本の方などは見向きもしないで、奉書のお草紙の上に、

やたら筆をのたくらせてゐる。雲と書き始めた文句が、雨とならない中に、筆がのたくつて龍のやうなめちやくちやな曲線を幾つも見せてゐる。一番最初の雲といふ字でさへ、まだハッキリとした形を成してゐない。まして、騰るといつたやうな難しい字は、まるで書く意志がないらしい。雲の形が中途から崩れ出して、雲中の龍のやうなでたらめな曲線になつてしまふのである。そして時々眼がお草紙から離れて、傍の金蒔繪の火鉢の方に移つて行く。が、その火鉢の手觸りの柔かさうな灰に立てられてゐる線香は、まだ半分もたつてゐない。それを見ると愈々退屈し始めた十四代將軍は二間ばかりの下座に畏まつてゐるお氣に入りの小姓の一人に目顔で笑ひかけて見る。が、小姓が案外眞面目くさつてゐるので、またし方なしにお草紙に雲と書き始める。が、雲は何時まで経つても混沌としたまゝである。雲と書き始めた筆が、自由に活潑

に紙の上を無意味に一巡すると、家茂公は手荒く新しい紙をめぐらる。先刻から何枚も眞新しい献上物の奉書を無駄にしたか知れない。奉書のお草紙は十五枚綴ぢになつてゐる。線香の方はともかくも、お草紙の方さへ方が附けば、その日のお稽古は終つたことになるのだ。線香がなか／＼たゝないと見てとつた家茂公は、今度は非常手段に出て、お草紙の方をなすり潰さうとしてゐるのである。

戸川播磨守安清は默然として家茂公の亂行を見てゐた。彼が習字のお相手として召出されてからまだ一月もたつてゐない。片假名やいろは假名のお稽古が濟んで、漢字のお習字に移ることになつて、彼はお相手として特に召出されたのである。林家の人々などを差越えてのかうした沙汰は、彼として絶大な名譽であつた。彼は老後の凡てをお役目の爲に盡くさうとしてゐる。そし

て將軍家の御手蹟を少しでもよくすれば、此の上の御奉公はないと思つてゐる。

處が、肝腎の家茂公は彼が手を執つて教へ始めてから、一字一畫も眞面目に書いたことはない。いろは假名の稽古の御相手が大奥の中老であつた爲だらう、習字といへば、ただ悪戯をして時間を潰しさへすればいゝと思つてゐるらしい。

幼少の折から、嚴しい師に就いて、一點一畫も忽にしないやうにと教へられた播磨守は、書道に對して可なり敬虔な心持を懷いてゐる。彼は口を漱いで手を淨めた後でなければ、筆を執つたことさへない。それなのに、家茂公は彼の面前で悪戯ばかりしてゐる。書を書くことの尊さを少しも知つてゐられない。慰み事か喜び事か、何かのやうに書を潰してゐる。家茂公のなすことが、凡て播磨守の心を痛めた。七十を三つも越してゐる一徹な播磨守の心

を痛めた。彼はどうかして主君のかうした心掛を矯さなければならぬと思つた。その爲には、縦令御不興を蒙らうとも、お役御免にならうとも厭ふ所でないと思つてゐた。お稽古の日は重なるに連れて、彼の決心は愈堅くなつた。所が、今日は家茂公の悪戯が、何時もよりもつとひどい。一字だつて眞面目には書かれないのである。

白絹のやうにつや／＼と光る奉書を、五六枚も無駄にして、更に幾枚かの紙に、でたらめな曲線を書かれようとした時である、播磨守は無言のまま、家茂公の筆を持つた手をキユツと握りしめた。家茂公はハツと本能的に駭かされたやうであるが、直子供ながらに自分の位置の優越を思出されると、威壓的な烈しい目附で、播磨守の顔をぢつと見られた。が、播磨守はビクともしなかつた。彼は、柔い小鳥のやうに生温い手を意識して、強く、少しは懲罰的に、痛

さを感じしめる位に強く握りしめながら、奉書の上に、雲騰致雨露結爲霜と書かせた。家茂公は、筋ばつた掌で握りしめられる痛み堪へかねて、途中で二三度振りほどかうとした。が、播磨守はいづかな放さなかつた。が、その八字がすつかり書かれた時である。播磨守がその堅い把握の手を緩めて、ちつと両手を膝に置きながら、公が書いたといふよりも、自分の書いた八字に眺め入つた時だつた。赤くなつた右の手をぢつと見てゐた家茂公は、机の上にあつた青磁の水入れを持つて立ち上ると、いきなりたつぷりと湛へられてゐた水を、播磨守の白髪の前へザツブリとかけたまま、

「わあつは、わあつは、」と笑ひながら、大奥の方へ走り込まれた。一徹な播磨守は、主君から——幼少の人の悪戯であるとはいへ——烈しい侮辱を受けたので、頭から落ちる雫を拭ひもやらず、机に両手をかけたまま、暫くは身動きもしないで考へ込んだ。

駭いて馳せ寄つたお側衆の小出勢州は、懷紙を出して播磨守の額から顎にかけて拭き下しながら、

「餘りなお悪戯ぢや。御幼少であるとはいへ、餘りな御亂行ぢや。御主君とはいへ、心外で御座らう。拙者から御大老に申上げて、きつい御諫言を申し上げることに致さう。御勘辨なされい、御勘辨なされい。」と氣の毒さうに慰めた。

播磨守は、默然として勢州の拭くの委せてゐたが、濡れた上下の威儀を正すと、心持ち聲を落しながら、

「井伊侯に申上ぐるなど、輕はづみなことをして下さるな。今日は上様の御仁慈のほどが、骨身に徹し申したわ。勢州殿、有りやうは、拙者今日はお机の前に坐つて以來、頻りに小用を催したのを、ぢつと辛抱致しをつた所、老年の悲しさには、懸命にお手を執つた砌、つい失念して尿を少々洩らしたので御座る。君前に於てかゝる

大不敬を犯したことが、若し大目附の耳に入らうなら、謹慎閉門はおろか、切腹の御沙汰にも至らうかと、心も心ならず苦慮致してをつたのを、それとお察し遊ばした上様は、拙者の失策を御自身の悪戯で掩ひ隠して給はつたのぢや。御仁慈のほど骨身に徹し申したわ。」と、老の兩眼に涙をひたくと湛へてゐた。

小出勢州を始め、並み居る近衆達は、あつとばかりに膝を叩いて、家茂公の聰明仁慈に感歎を上げた。

その事があつてから、此の話は江戸の城の隅から隅へと傳へられた。登城する大名の一人から一人へと傳へられた。異口同音に、名君家茂公の君徳を稱へぬ者はなかつた。唯これを聞いた大老井伊直弼だけは、話を半分ほど聞くと、眉をひそめながら、

「お悪戯にも程のあつたものぢや。」と言つたまゝ、話手が家茂公を讃め上げるのを聞いても、にこりともしなかつた。(菊池 寛)

## 一一一 佛法僧

「雨月物語を見た人は、高野山といへば一番に佛法僧鳥の事を思ひ浮かべるであらう。此の鳥は日本國中二三の名山のほか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に

閑林獨坐草堂曉 三寶之聲聞一鳥 一鳥有聲人有心

聲心雲水俱了々

とあるやうに、其の啼き聲がぶつ、ばふ、そ、うと聞えるさうで、法の御山にふきはしい靈鳥として、特に持て囃されてゐる。是に於てか秀吉の歌といふに、

傳へにし鳥も御法を行ひの  
佛法僧と鳴くを傳へられたる言に有明の月高野にひやく  
聲は高野に有明の月。

とかいふのがある。公卿僧侶の歌は固より澤山ある。中にも上田秋成は此の鳥に豊臣秀次の幽霊を配して「雨月物語」の一章としてゐる。其の物語は趣味ある文字として、嘗て愛誦した事があつた。

「今夜奥の院に行つて佛法僧の啼き聲を聞いて来るから、提灯を貸してくれ給へ。」と給仕の小僧さんにいふと、「畏まりました。」と小僧さんは笑ひながら、膳を下げて降りて行つたが、幾ら待つても來ない。一時間も経つてから、「本當に行くのですか。」と聞きに來る。「勿論本當に行くさ。」と答へると、「途

中で何か出ますよ。」といふ。「何が出る。猿でも出るか。」と聞くと、「新墓から幽霊が出ますよ。」といふ。晝間通つて見た時は大名などの古い墓ばかりが目に着いたが、成程中には新墓もあらう。「新墓の幽霊位屁でもない。」と元氣な事をいうてやる。小僧さんは又薄氣味の悪いいやな笑ひやうをして降りて行つたが、暫くして二つ巴の紋の附いてゐる大きな提灯を持つて來る。さうして、「幽霊の外に野衾も出るさうですから氣をおつけなさい。若し二時間も経つてお歸りが無かつたらお迎へに行きます。」と洒落れた事をいふ。小僧さん自身に提灯をつけてくれて、表門は締めてしまつたから、裏口から、御案内ませう。」と先に立つ。此の小僧

さんは十六だといふに馬鹿に背が低い。其が大きな提灯を提げてゐるので、少くとも芝居の土蜘蛛に出て來さうな恰好だ。下駄を穿いて臺所の横にまはる。廣い臺所には一つ灯がともつてゐるばかりだ。暗やみの中に二三人の小僧さんが笑ひながら我等を見送つてゐる。其が提灯の光で僅かに見える。

がり／＼／＼と音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩疊な裏門のくくり戸を小僧さんが先に立つて開けてくれた時、鐵の鎖の戸に軋る音であつた。小僧さんが突き出す提灯を受取りながら表に出る。表は暗い。星はあゝるが僅かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提灯

を便りに其の白い土塀に添うて表通りの奥の院道に出る。門前の珠數屋ももう戸を下してゐる。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木



高野山の奥の院

が襖の如く連なつてゐる。其の左右の襖でたて切つた中に帯のやうに幅の狭い空が見える。其の空には星が光つてゐる。

平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提灯の光で僅か

に足許を探つて歩く。晝間は氣が附かなかつたが、縦横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに随つて隆起して、終に杉の大本に集まつてゐる。未央君は提灯をさし上げて、其の杉の幹に押しつけるやうにして歩く。未央君が三間ばかり歩いて、まだ杉の半面を照らし盡くさぬ。夜の杉は大ききのわからぬ巨人の如く突立つてゐるのである。寢鳥の立つ音がする。見ると、提灯の上から圓筒の如く丸い光が空中に射出されて、其が高いく杉の梢を彷徨うてゐる。寢鳥が泡を食ふのも尤もだ。歩きながら、未央君に「雨月物語」の話をする。墓原の中に

裸火らしい火が二つともつてゐる。何處やら心細くなる。斯ういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に薄ぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと氣にしなから行くと突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がかつてゐる。

向うからふらくくと提灯が一つ来る。急に見えなくなるのは杉の木に隠れるのであらう。直また現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ様によく見ると「釣狐」の狂言に出る白藏主に似てゐる。

行手に燈籠らしい灯が三つともつてゐる。近寄つて見



ると御廟の橋だ。未央君が橋の上から提灯をつり下げて水面を照らして見る。玉川の水は火を受けてちら／＼と流れてゐる。燈籠堂はもう直其處に在る筈だが、眞暗で其らしいものは見えぬ。怪しみながら近寄つて見ると、すっかり四周の蔀を下して、寂然として寢靜まつてゐるやうだ。數百の燈籠のともり連なつてゐる夜の景色は、淋しくも嚴かであらうと思つて、樂しみにしてゐたのに、これでは唯眞黒な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。燈籠堂に添うて御廟の前に出る。

御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六個の小さい釣燈籠がともつてゐる。其の光で僅かに御廟の屋根と二三本の

杉と線香立てとが見える。此の線香立てには、晝間見た時は煙が雲の如く渦卷いて居つた。其の煙の中に珠數をくすべたり、鈴をくすべたりしてゐた信者が今は一人も見當らぬ。人間が居らぬばかりでなく、今は一條の煙も昇つてをらぬ。提灯を其の中に突込んで覗いて見ると、冷たくなつた灰の中に線香の燃え滓の赤い紙が四五本殘骸を留めて居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立てだと思つたが、寂然として靜まりかへつた所を見ると、愈々偉大な線香立てである。燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて、縁に置かれた提灯の灯が心細さうにまたゝいてゐる。遠方

で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺はない筈だが不思議だと思ふ。其の鉦の音に聴きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたましい鳴き聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帯びた聲だ。襟元から手を突込んで背なか中を搔きまはされたやうな氣持になる。鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが今の鳴き聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて提灯をさらつて行くやうな事はあるまいかと氣になる。氣のせい、提灯の灯は一層

心細さうに瞬いてゐる。

小さい咳拂ひが聞える。おやと思ふ内、又一つ聞える。其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に一寸した明りがある。此處は晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直に番人の部屋と想像がつく。試みに其の傍に行つて、「もし、く」と呼んで見る。「へい」と返事をする。「一寸伺ひますが、あの恐ろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です。」といふ。「へえ、何といふ獸です。」と聞くと、「野衾」といふて、蝙蝠のやうな、鼬のやうな、妙な恰好をした獸です。」といふ。あれが野衾かと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれは何處で

すか。」と聞く。番人は一寸黙つてゐたが「あれは鉦ちやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。鉦の音かと思つてゐたのが鳥の鳴き聲であつたのは意外であつた。殊に其を聞かう爲に來た佛法僧であつたのは愈、意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。矢張りカン／＼／＼と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、カンと響く前にブツといふ低い音が聞える。ブツと低く響いてからカンと高い冴えた音が響く。つまり、ブツカン、ブツカンと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くとあるが、「雨月物語」には佛法といふ

字に態「ぶつばん」と假字が振つてあつて、ブツパン、ブツパンと鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の鳴き聲はブツカン、ブツカンと聞えるが、先づ「雨月物語」のブツパンに近いやうだ。妙なもので初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初鉦の音と聞いた時も嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を連想したが、これが生物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に濕ひのある事に氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならぬと鳴かぬのに、今晚は宵の口から頻りに鳴いてゐた。」といふ。さういふ内も絶えずブツカン、ブツカンと聞える。普通の鳥とは餘程違つ

てゐる。法の御山の靈鳥として恥づかしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌がこれを持って嘲したのも尤もだ。私は嘗て高野の山の靈山であることは奥の院道の杉並木で證據立てられるといつたが、否々杉はものかは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると遙彼方の縁に置かれた提灯の灯も今は靜かにもつてゐる。番人は淋しい燈籠堂の夜陰に偶、話相手を得たので、問ひませぬのにいろ／＼話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、中にも此の燈籠堂で焚く油は夥しいもので、月に一石から二石の間を往來してゐる、殊に三月二十一日の御影供の時は、一日に一石の油を焚くといふ事と、貧の一燈の灯

は信者の所望によつて線香に移してやる、其を北海道や九州あたりまで持つて歸る、中には途中で消えたといふので大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは面白かつた。

ふと氣がつくと、佛法僧は何時の間にやら鳴かぬやうになつてゐた。唯野衾が時々荒膽をひしぐやうな鳴き聲をする。歸途に着く。

御廟の橋にかゝつた時、未央君が「また鳴く。」といふ。向うの墓原を縫ふやうに提灯が一つ來る。女が三人に男が一人「南無大師遍照金剛」と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

(高濱虚子)

一三 小松原(一)

小松原の一部

一面の平舞臺は小松原の心にて、間近く連山見え、低き丘あれど、大體より見て平地ともいふべき名の如き小松原。どこからも通行が出来るゆゑ、道は四通八達といつてもよい。時雨は今は今全く霽れ上つて、大分高い所に出てゐる十一日の宵月は、浮雲に屢、遮られて四邊時々薄昏くなる。こゝに、中央に日蓮上人、僧衣に袈裟を掛け、手に珠數を持ち、立身。其の上手に長英坊、乘觀坊の二人が二人とも幾らか手疵を負つた體にて、長英は戒刀を、乘觀は敵から奪つたらしき白刃を提げてゐる。長英と乘觀とは膝まづいて上人を諫め止めてゐる體である。

乘觀 勿體ないことを仰せられます。(といつたが、感極まつてか、あとを續けかねる。と)

長英(が引取つて) どうぞこゝは、私共にお任せ下さいまして、ど

うぞ是非お落ち遊ばして下さいまし。

日蓮 いや、さうでない。鏡忍を見殺しにした上にお前らまでどうして見捨てることが出来よう。初から法華



經の爲に獻つた此の命を、正に法華經の爲に失ふといふ、これほどの悦が又とあらうか。人

日蓮 間は誰しも一度は死ぬのぢや

が、斯ういふ死に方は、一切衆生を生返らせる死に方で、最も望む所ぢや。お前ら最早手對ひは決して無用ぢや。題目を高く唱へ、して命を終らう。

乗觀（泣きながら）鏡忍を始め私共にまで、それほどの御憐愍をお掛け下さいまするは、有りがたいとも、忝いとも、申し上げやうはございませぬけれど、日本國の只一本の大柱ともお頼まれ遊ばす大聖人が、こんな鼠輩の爲に、大切なお命をお捨て遊ばすべきぢやございませぬ。是非ともお落ち遊ばして下さいまし。

長英 もうこゝから天津までは、たかが十一二町でございませぬ。あそこへお落ち遊ばすまでは、きつと私共が防ぎませぬ。どうぞお落ち下さいまし。

日蓮 いや、其の志は嬉しいが、此の上お前らを見殺しにすることは、どうしても出来ぬ。お前らと一緒に死なう。

乗觀 其のお慈悲のお言葉は、失禮ながら、大日本國をお忘れ遊ばしたお言葉でございませぬ。國家の爲でございませぬ。是非ともお落ち下さいまし。（泣きながらいふ。）

日蓮 いや、法難の爲に死ぬのが、それが即ち國の爲ぢや。

此の時又聞の聲

長英 あゝ、もうやつて来ました。

長英は無理に上人の手を取つて下手へ伴なはうとする。上人は行くまいとする。此のうち、上手より東條の兵共、或は腹巻姿、或は前幕の狩装束のまゝにて、手々に長巻其の他の武器を振翳し、おひくりに追ひ追つて来て競ひかゝる。乗觀坊太刀を振つて之を逆襲し、忽ち追返し、尙追撃しつゝ、上手へ入る。此の間に長英坊は無理に上人の手を引張る。上人は目前逆襲して働いてゐる乗觀の志を無にもならぬといふ思入れて、長英に引かれて下手の奥へ入る。

と、乗観が拔駈けする敵三四人を追駈けて、又上手から出て来る。其の中に敵勢は次第に加はる。乗観危くなる。と、長英が下手奥より駈け戻つて来て、それを救ひ、二人にて苦戦し、と、乗観は上手へ、長英は下手（花道の方）へ敵を追ひ靡けつゝ入る。二僧とも始終南無妙法蓮華經を口の中で唱へつゝ戦つてゐる。

舞臺が空になると、上手のやゝ奥の方の丘の蔭より、東條左衛門の尉景信、服装は前の幕の狩装束のまゝだが、頭には侍烏帽子をいだき、馬に跨り、手に白刃を提げて、真先に駈けて出る。少し後れて其の後から、天面五郎つづいて出る。中央まで来ると、景信は馬を止めて、あちこちを見廻すことありて、

景信 坊主め、どこへ行きやがつたか。まださう遠くへ行く筈はない、どつかに隠れてゐるに相違ない。逃がしつちまつちや残念だ。どつちへ行きやがつたらう。五郎、そこいらの松の蔭を捜して見る。

天面 かしこまりました。

と其の邊をあちこちと捜し廻る。此のうちに景信は下手の奥を透して見て、

景信 むゝ、たしかに坊主らしい後影があそこに見えるぞ。

五郎 つづけ。

と馬に一角入れる。途端に舞臺を薄昏くして、又関の聲を聞かせ、よきほどに明るくする。と

## 一四 小松原 (二)

### 小松原の他の一部

前とほぼ同じやうな松原、但し前のよりも多少丈の高きひよろ松が簇生して、林の形をなしてゐる部分。月の在り處も前の場とは異なつてゐる。

こゝに中央のやゝ下手寄りに、下手へ向いて日蓮上人前の場の通りの服装にて立ち身。其の前に土下座して上人を仰ぎ見て、何事か訴へてゐるらしいのは小草である。これも前の幕と同じ風體。少し下手の其の脇に長巻が置かれてある。

日蓮 それは殊勝なことぢや。それ程に思うてくれるのは嬉しい。禮をいひますぞ。けれども、わしと一緒にいくのは危い。途はよう知つてをる。わしはやつぱり一人で行く。殊にそんな刃物なんかは持つてをらぬ方がよい。そこへ棄てておいて、早うこゝを離れなさい。

小草 お上人さま、いゝえいゝえ、それはいけません。まだどんな亂暴な者が追つかけて来るかも知れませんから、私がお供します。さ早く、すぐお出かけなさいまし。もう

少うしいらつしやれば、本海道へ出ます。きつともう天津の殿さまがお迎へに来ててございます。もうすぐでございます。さ、早くお出かけなさいまし。

此の途端、上手にて東條景信の聲にて、

景信 しめた。慥に日蓮だ。五郎、つづけ。

と叫ぶ聲が聞える。小草覺えず長巻を取つてつつ立ち上手へ廻る。上人之を止めようとするうちに、上手より東條景信前の場の通り、馬を走らせて出で來り、

日蓮坊主、そこ動くな。

といひもあへず、太刀を振りかぶつて斬りかけようとする。小草咄嗟に上人を押し隔て、がむしやりに長巻を振廻して景信を遮る。景信いらつて、

え、つ邪魔するな。どけく。



と、さすがに斬りおろししかねて、二三度長巻を撥ねのけたが、尙うるさく遮るので、大いに怒り、

え、面倒な

とむね打ちをくらはす。これにて小草は「あつ」と叫んでよろめき、長巻を取落してばつたり倒れる。これより先上人は小草を止めかねて観念し、傍の松蔭に佇みて、小草の殊勝な働を打ちまもつてゐる。小草が「あつ」と叫んで倒れると、景信はつと馬を駈け寄せて、斬つてかゝる。上人は景信が小草を斬り殺したと思ひ、憤激し、今駈け寄る景信をはつたと睨み、

日蓮

無道人めが。

と一喝する。と、馬は物におびえたやうにたぢ／＼と後しざりする。此のうち小草は又むつくと起上つて、駈け寄り、馬の尻尾を掴んで手強く引く。馬あばれる。景信もて餘す。途端に天面五郎が駈けて来て、此の體を見るや否や、小草の肩先を一刀に斬り下げる。これにて小草は尻尾を離して倒れかけたが、踏みこたへて落ちてゐた長巻を拾ふや

否や、

小草 南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

と高聲に唱へながら無我無中の體で五郎に斬つてかゝる。五郎あしらひかねて、花道の中程まで退る。此の時景信は再び上人の間近く馬を進めて、

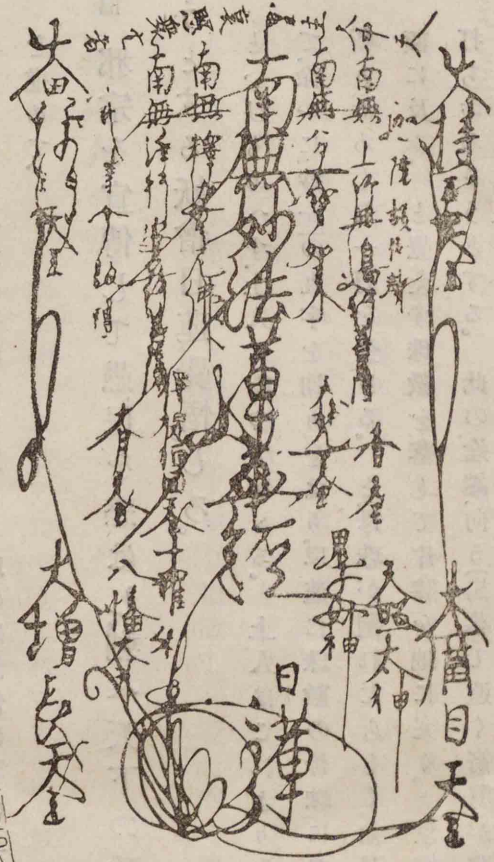
景信

邪宗を宣傳して愚民を惑はし、剩へ天下の政道を亂さ

うとする妖僧日蓮、覺悟しろ。

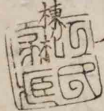
といひもあへず、上人に斬つてかゝる。上人はこれより先、珠數を握つて徐かに「妙一」の九字を切りをはり、早速に珠數の母珠にて景信の恰も斬りおろした一刀を受ける。と、母珠が割れたらしく、太刀先が上人の額に及ぶ。と、覺えず珠數を落して片膝を地に突く。景信二の太刀を打ちおろさうとする。此の途端、向う(揚幕)で遠く箭聲が聞えて、一箭飛び來つて、景信の馬の平首に立つ。これにて馬が逆立ちとなりて、景信は落馬する。と、馬はすぐ上手へ駈け去る。此の時、小草は五郎に又一

太刀斬られて長巻を落し倒れる。五郎は景信の落馬を手を負うたと



羅茶曼目題

伊豆並山江川太郎左衛門家作棟



誤解し慌てて肩に掛けて上手へ急ぎ退き去る。上人は静かに起上り、額の傷を懐中紙を取出して拭いてゐる。

と、向う(揚幕)より工藤左近丞吉隆前の場の服装にて、題目曼茶羅を結び付けたまゝの重簾の弓を脇ばさみ、騎馬にて北浦兄弟外二人を随へて駆けて出で、月の光にて松林の方をきつと見て、上人の無事なのを見つけ、

吉隆 おゝ、御安泰だ。

と片手に天地を拜して、家來を顧みて、

喜べ。見ろ、上人は御無事でいらせらるゝぞ。 つづけ。

と本舞臺へ來り、急ぎ馬より飛下りて、上人の前に主従一同平伏する。

吉隆は上人を三拜して、

いまだ親しくはお結縁を蒙りませんかつたが、手前儀は天津の工藤吉隆でございます。御危難と承りまして、取るものも取りあへず、駆けつけましてございます。御安泰であらせられます尊顔を拜しまして、此の上の喜はこ

ございません。手前参りました上は、恐れながら、必ず御安心遊ばしませ。

日蓮 左近どのでござるか。まだお臥床中と承りをつたのに、早速の御來護、忝うござる。

吉隆(と此の時吉隆は上人の手疵に始めて目をつけて、大いに愕きや、上人にはお手疵を負はせられましたか。それ、忠吾、手おくれにならぬうちに。

日蓮(制して)いや、決して御心配なさるな。こりやほんのかすり疵ぢや。わしよりも弟子のもの兩三人、わしを落さうとて、今まだあちらで大勢の敵と苦戦してをる。或はもう落命したかも知れぬが、どうか彼等を救つてやつ

て下さい。

吉隆 では、あのお弟子がたが。心得ました。すぐさまお救ひ申しませう。では、(と北浦兄弟を見返り)汝等は上人をお警護申し、あれなる鎮守の森まで御案内申し上げて、早速お手疵のお手あてをしる。おれはお弟子がたをお救ひ申して、直後から行く。萬一手間取るやうであつたら、先へ邸へ御案内申せ。御免下されませ。(と吉隆馬に乗らうとする。)  
日蓮(止めて)いや、其の鎮守への路は心得てをる。御案内には及ばぬ。それよりも敵は大勢ぢや。御家來衆は是非悉くお連れなさい。小勢では心元ない。  
吉隆 お言葉ではございますが、まだ何處にどういふ伏せ勢

がをるやも圖られません。臆病を名代の東條の家の子共なんどが、何十人参りませうとも、忽ち追つ返して、お供を致します。かやう申す間も心がせきます。どうかともかくもお立退き下さいまし。どうぞ是非(と促すが上人は動かない)では、せめて兩人だけそれ、忠内早く御介抱して御案内をせい。源次もお供をしる。(二人は上人の傍に附添ふ)日蓮それほど言はれるなら、一足先に行きませうが、介抱には及ばぬ。わしの介抱の代りに、あの少女を介抱してやつて下さい。あゝ、憫然な事ぢや。

と上人は瞑目して、口の中にて題目を唱へる。忠内寄つて、半死半生の小草を抱き起し、顔を見て、

忠内 お、此の娘は、

と、又聞の聲が聞える。此のうち吉隆は手早く曼荼羅を弭から脱して巻き收め、押戴きて懐中し、

吉隆 さ、早く、……御免下されませ。

と、又馬に跨る。忠内は他の一人と共に、片息になつてゐる小草を介抱して、上人を促して、花道より向う揚幕へ入る。

と、上手より東條彌八郎を先に、四方木の兵太随ひ、新手の兵の心にて勢ひ込んで駈けつける。

彌八 工藤どのに物申すぞ。各宗を讒謗し、鎌倉どのの政道を非議し、魔法を使つて世を亂す狂坊主の日蓮を庇ひ立てめさるからは、お手前は明白に鎌倉どのの罪人でござる。容赦はいたさぬぞ。覺悟めされ。

吉隆 さういふお手前らこそ、悪宗門の肩を持つて聖僧を讒

誣し、何罪もなき良民を無法に殺戮して悔ゆることなき  
残忍無慈悲の無道人ぢや。天に代つて吉隆が誅戮する  
覺悟なさい。

と弓を投げ捨てて、太刀を抜く。

彌八 何を。

東條の兵ら一齊に競ひかゝる。暫くごつちやの立廻り。とど東條方  
叶はず上手へ逃げる。吉隆主従それを追ひ討ち、共に上手へ入る。  
又舞臺を薄暗くする。其の薄暗い中で、遠く又関の聲。其の聲の消え  
てしまふ頃段々明るくなる。と、

### 一五 小松原 三

#### 小松原附近の鎮守の杜

中央に小さき神社。其の後にも、左右にも、年を経た樹木並び立ち、よき

處に鳥居。上手の一隅に御手洗の古き泉。群樹の透間より間近く海  
が透けて見える。

こゝに中央に上人切株に腰掛け、忠内は御手洗を酌んで来て、他の一人  
と共に上人の顔の疵を洗ひ、繻帯を參らせなどしてゐる。下手には小  
草の死骸が横たへてある。

忠内 嘸お痛み遊ばすでございませう。

日蓮 いや、もう痛みは薄らいだ。お太儀、お太儀。左近  
どのの事が心懸りぢや。わしはこゝにかうしてをれば  
大丈夫ぢや。往つて見て来て下さい。

忠内 畏まりました。

と、忠内は他の一人を残して置いて、急いで、向う揚幕へ入る。と上人は  
じつと小草の死骸を見やつて、

日蓮 あゝ殊勝なのはあの少女ぢや。(と徐かに立ち寄つて暫く合

掌默禱して良薬は、其の良薬たることを絶えて知らざらん者と雖も、之を服すれば病癒ゆる。此の一少女、生前は無智蒙昧、其の命を終はる數刻の前までは、未だ曾て妙經の一語をだに會得せず、況や其の甚深の義理をや。然るに、一旦にして妙法の徳に感じ、口に南無妙法蓮華經を唱へつづけて、勇猛壯烈の武士の如くに、妙法の爲に命を獻じ了んぬること此の如し。其の志は古の聖者にも劣るべからず。一心欲見佛、不自惜身命、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

此の時、向うより(花道を経て)痛手を負ひて、刀を杖によるめきつゝ歩む吉隆を右左より介抱して、忠吾忠内、又其の後よりは吉隆の家來二人に

抱されて、同じく手負ひの乗觀、長英出で來り、やう／＼にして本舞臺へ來ると、皆々宜しく上人の前に平伏して會釋する。中にも吉隆は上人の顔を見上げると同時に、嬉しげに打笑んだが、氣が緩んだらしく、がつくりと瞑目し、もう物は言はれぬらしく、只合掌するのみである。

上人は、痛ましげに其の傍に立ち寄りて、しづかに、

吉隆どの、吉隆どの。

と二度呼ぶと、吉隆は微かに目をあいたが、又忽ち目を瞑ぎて再び合掌する。上人も暫く無言で落涙の體。皆々も顔を擧げ得ず、泣いてゐる。獻歎の聲も聞える。上人はこごんで吉隆の手を取つて、耳元に口を寄せて、

無上妙法の爲に、一身を獻ぜられた大功德、あつばれのお手柄でござつたぞ。姿は其のまゝ、ちやが、見事に不惜身命の大行者たる務をお果しなされた。今日只今日蓮が

上人號をまゐらせて日玉上人と呼び申すぞ。吉隆どの吉隆どの。

これにて吉隆又かすかに目を開きにつこりと笑み、又目を閉ぐ。其の間少しも合掌の姿勢を崩さない。

日蓮も或は程なく參るであらう。が、若しお手前の方が先であつたら、あの世に往つて、立派に梵天・帝釋・四天王・閻魔大王らに名を名宣つてお聞かせなさい。日本第一の法華經の行者日蓮坊に随つて、法難に身を捨てたとお名宣りなさい。歡んでお迎へなされうぞ。あゝ、如來の現在にすら猶怨嫉多し。況や、滅度の後をや。身輕法重、死身弘法。(と唱へ了りて更に形を改め)今身より佛身に至るまで能く保ち奉る。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙

法蓮華經……

と唱へつづける。吉隆落入る。皆々落涙しつゝ、同じく合掌して同音に。

皆々 南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

此の唱題目の續く間に、靜かに暮。

(坪内逍遙)

### 一六 龍の口

文永八年九月十二日、淋しき秋の夕暮近き申の刻、松葉ヶ谷の庵室近くに聞ゆる人馬の物音。今しも日蓮高座に在つて法弟に説法の最中、何事やらんと振返れば、塵滾々たる間に先に立てるは平左衛門尉頼綱、從へる兵士凡そ三百餘人。胴丸に身を固めて烏帽子を著け、はやひしくと庵室

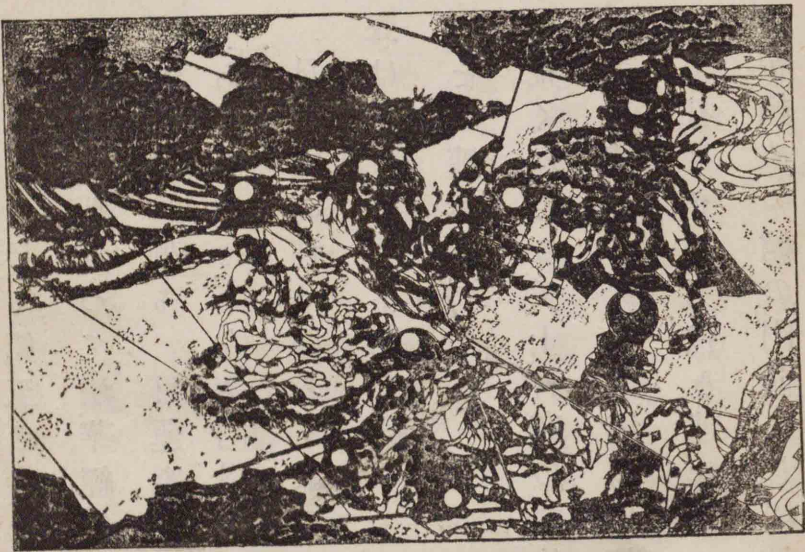
を取圍む。頼綱馬上にて、

「如何に日蓮、思ひ知つたるか。日頃の悪行其の罪重く、此の度死罪に行ふことに定まつたり。斯く申す平左衛門尉御館の命に由つて向うたるぞ。尋常に縛めにつけや。」といふ聲、鳴る神の如く庵室の上に響きぬ。「すはこそ」と法弟檀方上を下へと騒ぐ。日蓮慌てず、手もて靜かに制し、立像の釋迦牟尼佛の尊體と法華經一部とを手早く懷にして、縁先近く立出づ。其の時日蓮心に思ふやう、

「日頃月頃思ひ設けし事は是なり。法華經の爲に身を捨てんこと何ぼう幸なる事よ。臭骸の頭を放たれんことは沙に黄金を替へ、石に珠を商へるが如きものぞ。今ぞ

時來ぬ。」

日蓮立出づと見るより、平左衛門尉の郎黨にて大力無雙の齋藤三郎躍上つて、日蓮の襟元つかんで、えいやつと縁先より大地に引落す。つづいて郎黨少輔房駈寄り、日蓮の懷にある法華經を眼敏く見て、  
「此の期に及びてまだ此の經に未練あるか。」



日蓮龍口の遭難



といふより早く第五の巻を取つて日蓮の面を散々に打つ。雑兵ども亂入つて法華經を踏みにじり、引破り、縦横無盡と庵室を暴れ廻る。日蓮高聲に呼ばはつていふ。

「あら面白や、平左衛門尉がものに狂ふを見よ。殿原唯今日本國の柱は倒るゝよ。」

聲はうなりを生じて、聞くものの膽を冷す。

「それ縛めよ。」

と荒くれたる兵士、日蓮の前後左右に立塞つて、難なく高手小手に縛む。従へる瘠馬に藁蓆を敷いて之に引据うるが如く打乗せ、長刀抜き連れたる三百餘人嚴に之を護り、武藏前司頼直の館の門前にしばし馬を繋ぐ。

日も暮れ、秋も暮れたる其の夜、此處を立出でて刑場なる龍の口へ向ふ。魚町の四辻より小町通りを引渡し、若宮小路に出で、鶴岡の八幡宮の鳥居前にさしかかり、長谷の小路より御靈の社の前に至る。日蓮涙と共に従へる童熊王を側近く召し、

「やよ、熊王、此の祠の北には四條金吾頼基殿の邸があるぞ。急ぎ往いて、我が今夜頸切られに罷出づる由を傳へよ。」といふ。金吾頼基兄弟四人、徒行跣足のまゝ、走出で、馬上に縛められて往く日蓮の姿を仰いで、あつとばかりに打驚く。日蓮遙に之を見て、近づく金吾兄弟に聲をかけ、  
「四條殿愈、日蓮の最期は近づきたるぞ。此の數年の間に

願ひつゝることは是なり。此の娑婆世界に在りて、雉子となりし時は鷹に捉へられ、鼠となりし時は猫に噉はる。或は妻子の爲に、或は財寶の爲に命を失ふものは、大地微塵の數よりも多し。されども法華經の御爲には一度も失ひたる例なし。日蓮貧しき身に生れて父母の孝養は心に足らず、國の恩を報ずるの力もなし。然るに今法華經の爲に頸を奉り、其の功德を父母に、其の餘りをば我が弟子・檀那等に分ち與へんとは思ふなるぞ。」といふ。金吾等とかくの返辭もなく、兄弟四人唯馬の口に取付きて、其の儘につき従ふ。極樂寺の切通しを過ぎて七里ヶ濱に出づ。月は雲に入

り雲を出で、曇りつ照りつ。見渡す海は渺々として三浦半島は夢の如く淡し。一行の振りかざせる松明は微かに砂の上に光を落す。日蓮身に著けたる七佛傳來の袈裟を血に穢させじと脱ぎ棄て、路のほとりにさし出でたる松が枝にかけさす。

四十餘町の濱路も今や最後と思へば、辿る行程いと近く、片瀬川を打越えて名も恐ろしき龍の口に著く。刑場は龍の口明神の社の御前波打ち際に柵かきしつらひ幕打廻して見る目も凄く嚴めし。夜はやう／＼更けて月黒く、警護の兵士が焚く篝火のみ煌々として白し。武士ばら／＼とかけ寄つて日蓮を馬よ

り引下し首の座に据ゑんとす。金吾頼基つと近づいて最後の暇乞と涙ながらに、

「御命も唯今を限りに御座りまする。」

といふ。日蓮莞爾と打笑み、

「不覺の殿原かな。これほどの悦を何とて笑ひ給はぬ

笑へく、大いに笑ひ給へ。如何に日頃の約束を違へ給ふぞ。」

日蓮敷皮の上に端坐して靜かに御經を誦す。平左衛門尉は遙に馬を控へて、此の有様を心ちよやと眺む。柵の外には日朗・日進・日興・日向・四條・池上・荏原を始め、いづれも妙法の功德を信ずる歸依の男女、涙に曇る聲を呑みて、口の裡に

普門品を唱ふる者もあり。

「或遭王難苦、臨刑欲壽終、念彼觀音力、刀尋段々壞。」

太刀取は依智三郎直重、三尺二寸の大刀をすらりと抜き放つ。篝火の光ははつと刃をすべりて、秋水一閃、鬼氣乾坤に満つ。日蓮今年五十歳の一生も今將に絶えんとす。

此の時虚空に光あり。江の島の方より忽焉として閃き渡り、團々として其の形鞠の如く、南より空を掠めて西南に飛び往く。暗をつんざく光鮮かに満月よりも猶明し。依智三郎直重が振り上げたる劔は、大空を斫つて日蓮の身を二つになさんとす。彼の時疾く此の時遅く、怪しの光は閃電の如く直重が眼を射て、はつと眩めき、持つたる劔を我に

もあらず大地に擲げつけ、其の儘そこにかつばと轉び伏す。不思議の天變に驚き恐れたるものは太刀取のみならず、並み居る警護の兵士或は平伏し、或は一町二町も遠く走り、或者は馬の上より飛下りて蹲踞り、或者は馬の鞍壺にしつかと齧りつき、其の儘に聲をも立てず。平左衛門尉頼綱は總身身の毛よだちてわなくと打震ふばかり。日蓮顧みていふ。

「如何に殿原かゝる大罪人を打捨てて何しにさは遠く立退き給ふぞ。近く打寄れや、打寄れや。」

聲は夜陰に響きしが近寄るものもなし。日蓮再び、

「夜明けなば見苦しからん。夜の明けぬうちに急いで首

打切れや。」

と呼ばはりたれど返す辭さへなし

餘りの不思議に平左衛門尉此の旨を早馬にて鎌倉に注進す。鎌倉にても不思議のしるしあり、重ねての沙汰あるまで日蓮の首打つべからずと、南條七郎立文をさし上げ、潮風に馬の鬣をふるはせて七里が濱を電の如く飛び來るに、はたと金洗澤の川邊に行合ふ。(これより後此の川を行合川と呼びなす。)

目前の奇蹟、つづいて師の御命助かりたるに、法弟檀方の喜は更なり、十三日の朝日あかくと海のあなたにさし上れるに、皆一同に合掌して南無妙法蓮華經と唱ふる聲は波

のざわめきと相應じて勇ましく響く。

(笹川臨風)

### 一七 徒然草より

#### (一) 石清水

仁和寺に或法師年よるまで石清水を拜まざりければ心残念に思ふ憂くおぼえて、或時思立ちて唯一人徒歩より詣でけり。極樂寺・高良など拜みて、かばかりと心得て歸りけり。さて、かたへの人にあひて、年頃思ひつる事果たし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。少しの

事にも先達はあらまほしきわざなり。

#### (二) 和漢朗詠集

或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、或人御相傳浮ける事には侍らじなれども、四條大納言擇ばれたるものを道風書かむこと、時代や違ひ侍らむ、おぼつかなくこそ。」といひければ、「さ候へばこそ、世にありがたきものには侍りけれ。」とて彌、祕藏しけり

#### (三) もろ矢

或人弓射る事を習ふにもろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて始めの矢に等閑の心あり。毎度唯得失なく、此の

一矢に定むべしと思へ」といふ。僅かに二つの矢師の前にて一つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心自ら知らずと雖も、師之を知る。この誠萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期す。況や一刹那の内に於て懈怠の心ある事を知らむや。何ぞ唯今の一念に於て直ちにすることの甚だ難き。

(四) 高名の木のぼり

高名の木登りといひし男、人を掬て、高き木にのぼせて梢を切らせけるに、いと危く見えし程はいふ事もなく、下る時に軒だけばかりになりて、過ちすな、心して下りよ」と言

葉を掛け侍りしを「かばかりになりては、飛下るゝとも下りなむ。いかにかくいふぞ」と申し侍りしかば、その事に候。眼くるめき、枝危き程は、己が恐れ侍れば申さず。過ちは易き所になりて必ず仕る事に候」といふ。あやしき下藤なれども、聖人の誠に適へり。鞠も難き所を蹴出して後やすく思へば必ず落つと侍るやらむ。

(五) 佛問答

八つになりし年、父に問ひて曰く「佛は如何なるものにか候らむ」といふ。父が曰く「佛には人のなりたるなり」と。又問ふ「人は何として佛にはなり候やらむ」と。父また佛の教によりてなるなり」と答ふ。又問ふ「教へ候ひける佛をば何

が教へ候ひける。」と。又答ふ、「其も亦先の佛の教によつてなり給ふなり。」と。又問ふ、「その教始め候ひける第一の佛は如何なる佛にか候ひける。」といふ時、父空よりや降りけむ、土よりや湧きけむ。」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ。」と諸人に語りて興じき。

### 十八 國民性と其の訓練 (一)

自分は國家の盛衰・興亡を左右する最も重大なる勢力は國民性格であると深く信ずる者である。古今東西の歴史に現れた國家興亡の跡を攻究して見れば、其の原因は固より多趣・多様であるが、皆其の民族の特性に歸著すべきものである。

仰、一個人の價値は種々の點から評定する事が出来るが、眞に其の人の運命を左右する者は其の人の性格である。或人は學術を以て社會を裨益し、或人は藝術を以て名を成す。又或は政治家として、或は軍人として、或は實業家として、國家有用の業務に従事する。而も此等孰れの方面に活動する人に就いて見ても、其の人の成功と失敗との原因をなす者は必ず其の人の性格である事は、自分が今茲に評論するを待たずして明瞭である。個人の價値及び其の成功・失敗の運命が、其の人の修養した性格の如何によつて定まるが如く、國民の價値及び運命も、同じく其の國民が自ら訓

練した性格の如何によつて定まる。一個人が成功するには必ず成功すべき理由があるが如く、一國の隆盛に赴くにも必ず隆盛に赴くべき理由がある。而して自分は其の最も重大なる理由を國民性格の如何に在るとなす者である。自分が茲に性格と言ふのは、道德實行の能力を指すので、之を徳性と云ふ事も出来る。さて此の性格又は徳性と云ふ者は、個人遺傳によつて得來つた賦性を本としてこれに道德的訓練を施した成果である。賦性は個人によつてそれぞれ異なる者であるから、其の訓練の成果たる性格も個人によつて一々異なるべき者である。故に道德又は性格の理想は一つであつても、個人の性格を劃一にする事は到

底出來難い事である。此の事は道理から推究すれば極めて明瞭であるが、教育上特に此の點に注意するやうになつたのは、未だ日淺き事である。彼の個性尊重の聲が教育社會に起つたのが即ち是である。

個性尊重の精神を國民の上に移せば、即ち國民性尊重となる。國民教育の上に就いて之をいへば、人類一般の理想を實現する上に於て、國民は其の民族の特性を尊重し、大いに其の長處を發揮することが肝要である。又國民教育をして最も適切にして且最も有効ならしむる道は、其の國民性を根柢として施すことである。此の如くして國民性の社會・國家の實際生活に關係する事は極めて重大であるが



故に、國民性の問題は國民教育上決して輕々に看過すべきものではない。

異なる所に就いて之を言へば、個人は一人として同じと言はるゝ者は無いけれど、人の人たる本性に就いてこれを見れば、個人皆一致すべき點を有することは誰しも疑はぬ所である。國家や民族の區別を離れて唯一の理想に向つて進まうとする宗教や、萬國共通の理論を立てようとする倫理學、哲學等の起つて來るのは、其の爲である。理想又は原理は同一であつても、實際の教育に於ては必ず國民の特色が加はつて來るから、世界劃一と言ふことは假令之を企つる者があつても、之を實現する事は出來ぬ。初から劃一

の理想や原理に拘泥して、少しも國民や國家の特色を顧慮せず、劃一の結果に到達しようとする者は、實際に迂遠な者と言はねばならぬ。之に反して國民性の長處短處を知悉して其の長處を發揮し、此によつて其の理想を實現し原理を貫徹しようとする者は、實際に適切なる者で、是が最も有効の方法である。

國民道德に就いて考ふれば、此の事は極めて明瞭である。人類一般の理想たる人道と國民道德とは、決して全然異なる二種の道德と見做すべき者では無い。國民道德の基礎は人類に共通なる人道にある。日本國民の長處によつて行はれる道德が、日本の國民道德である。換言すれば、日本

國民の間に發達した最も正しき道德が、日本の國民道德に外ならぬ。日本人は國民道德を行ふ事によつて日本人の長處を發揮するのみならず、同時に人道の精神をも發揮する事を得るものである。忠孝と言へば、外見上は人道と相距る事遠きやうに見えぬことも無いが、さて其の精神に徹底して見れば、我が國の忠孝は愛國心と同じく實に人間の至誠を根柢として居る。至誠を根柢とした忠孝は民族や時代の區別を超越した人道と言ふ事が出来る。而も至誠を根柢とせぬ忠孝・愛國心は十分なる國民道德とは言はれぬ。我が國の忠孝乃至愛國の教は、我が日本國民性に基ついた者である。而も此の國民道德によつて吾が國民は十

分に人道の精神を發揮する事を得るものである。國民性尊重の聲の起るべき所以は茲に存するのである。個人の性格は非常の時に最も分明に暴露するが如く、國民の性格も國家の大事件に際して最も著しく現れる者である。歐洲大戰亂の如き、其の起因も經過も結果も關係國の國民性の記録と見做す事が出来る。又戦後の國運の消長も一に國民性の如何に左右せらるゝ者と信ずる。武裝の平和も實戦も、結局各國民の實力の競争で、將來に於ても列國國際間の競争は、益劇甚に赴くとも輕減する事は無いと思はれる。而も此の競争場裡に立つて最後の勝利者となる者は、最も優秀なる國民性を具へた者で無ければなら

ぬ。國際間の競争は結局國民性の優劣の競争に歸着するものである。果して然らば、將來世界の競争場裡に立つて大活躍を試みようとする者は、平生世界の如何なる國民に比しても遜色なき優秀なる國民性を訓練することを務めねばならぬ。

### 一九 國民性と其の訓練(二)

我が日本の光榮ある歴史は、日本民族の優秀なる國民性を有する事を證明して居る。殊に明治維新以來の進歩發達は之を國民性に歸せざるに解釋する事は不可能の事である。東亞に國多しと雖も、能く泰西の列強に伍して世界の

一等國に進み得た者は、獨り我が日本あるのみである事は、我が日本國民の東亞諸國に卓絶して居る證據と言はねばならぬ。我が日本民族に固有なる國民性は、民族と歴史を同じうする者であるが、日本人が此に對して自覺し且自信を深うするに至つたのは極めて新しい事である。而も日本最近の急速なる進歩發展は此の自覺と自信とを基礎として居る事は、何人も之を疑ふ事は出来ない。將來に於ても此によつて大いに進歩發展するであらう。我が日本國民性優秀の自覺が日清日露兩戰役によつて著しく喚起された事は極めて明白である。此の二大戰役は孰れも國史上千古未曾有の大事件であつた爲に、國民性

は最も著しく發揮せられ、而も其の國民性は宇内に比倫なき者である事を自覺せしめた。日清戦争の勝利は日本が西洋文明の輸入に於て一日の長者であつた所から得られたとも解せられ無い事も無いが、日露戦争の勝利に至つては、日本は外國の借り物によつて勝つたのでは無く、日本人が祖先以來民族として血管内に固有して居る國民性によつて勝つたと解釋する外は無い。日本武士道の名は戦勝の榮譽と共に世界の津々浦々まで響き渡つた。日本人は古來外國人の學んで容易に達し得可からざる長處と特色とを持つて居る事が、武士道の研究によつて外國人にまで知られたのである。

國民性は個人の性格と同じく固定したもので無く、修養・訓練の如何によつて消長するものである。而も此の消長が直ちに國家の盛衰を左右する。されば國民性の研究は唯理論上の研究に止つてしまへば、國民に取つてはさ程の用無きものである。又長處を列舉して自畫自讚に得意の鼻をうごめかすばかりでは、却つて油斷大敵を招く虞がある。若し國民の長處を自覺するならば、大いに之を自重し、自信を以て之を發揮し、若し短處を自覺するならば、之に落膽せず進んで之を矯正する事を計らねばならぬ。一國の勃興は長處の自覺に伴ふ自重・自信に負ふ所が多いのは特に注意を要する點である。我が國民は、日本の將來に對

する天職を全うするに必要な自己の長處の自覺・自信・自重に就いて、果して十分の覺悟ありや否やを問ひたい。

國民性の長處は既に大いに之を自覺したとしても、將來の日本に於て如何にして之を維持し、又如何にして大いに之を發揮すべきかに就いては、まだく、攻究を要する點が澤山ある。

我が日本の國民性は、過去に於て既に支那・印度の思想の影響によつて變化された事が疑ふ可からざるが如く、現代の日本人は西洋人の思想によつて偉大なる感化を受けてゐる。西洋の思想にも長處・短處がある。彼の長處は偶、以て我の短處を補ふ方便となる事が少く無いけれども、若し

彼の短處を學べば我が長處を破壊し去る虞がないとはいはれぬ。若し彼の長處を取つて我の短處を補へば、我は益向上發展の途に進むばかりであるが、若し彼の短處を學んで我の長處を失へば、我は次第に墮落退歩する。若しさうなつたならば、外來の思想にかぶれて日本國民の本領を失うたものである。

日本人は獨立の國民たる以上、獨立の國民思想を持たねばならぬ。獨立の國民思想は國民性に根柢を有する者でなければならぬ。國民の本領は斯くして發揮する者である。されば最もよく日本國民の本領を立てて、益其の長處を發揮し、又其の短處を矯正して、大いに民族發展を圖らう

とするには、我が國民性の長處・短處に就いて大いに反省・考究を重ねねばならぬ。殊に短處に就いては最も嚴肅の態度を以て反省し、是が矯正訓練の道を講ぜねばならぬ。

(野田義夫)

### 二〇 逆 艦

同十五日に源氏は西國へ發向す。日頃渡部・神崎兩所にて舟揃へしけるが、今日既に纜を解きて、參河守範賴は神崎を出でて、山陽道より長門の國へ赴き、大夫判官義經は南海道より四國へ渡るべしとて、大物が濱にあり。平家は又屋島を以て城廓とし彦島を以て軍の陣とす。前中納言知盛

攝津尼ヶ崎の西南に當る。

卿九國の兵を率して門司の關を固めたり。

大夫判官は大物の浦にて、大淀の江内忠俊を以て船揃へして、軍の談議ありけるに、梶原平三景時申しけるは、船に逆艦と申す物を立て候うて、軍の自在を得るやうにし候はばや。と申しけり。判官逆艦とは何といふ事ぞ。と問ひ給へば、梶原逆艦とは船の舳に艦へ向けて艦を立て候。其の故は陸地の軍は進退逸物の馬に乗つて心に任せてかゝるべき處をばかけ、引くべき折は引くも安き事にて侍り。船軍は押早めつる後押戻すはゆゝしき大事にて侍るべし。敵強らば舳の方の艦を以て押戻し、敵弱らば元の如く艦の艦を以て押渡し侍らばや。と申したりければ、判官軍といふは大

將軍が後にてかけよ攻めよといふだにも、引退くは軍兵の習なり。況やかねて逃支度したらんには、軍に勝ちなんや。と宣へば、梶原大將軍の謀の善しと申すは、身を全うして敵を亡ぼすなり。前後を顧みず、向ふ敵ばかりを討取らんとて、後を知らぬをば猪武者とてあぶなき事にて候。君はなほ若氣にて斯やうには仰せらるゝにこそ。」と申す。判官少し色損じて、「知らずとよ、猪鹿は知らず、義經は唯敵に打勝ちたるぞ心地はよき。軍といふは家を出てし日より敵に組んで死なんとこそ存ずる事なれ。身を全うせん、命を死なじと思はんには、本より軍場に出でぬには若かず。敵に組んで死するは武者の本なり、命を惜しんで逃ぐるは人なら

ず。されば、わ殿が大將軍承りたらん時は、逃儲けして、百挺千挺の逆艦をも立て給へ。義經が船にはいましければ、逆艦といふ事聞くとも聞かじ。」と宣へば、あたり近き兵ども是を聞いて一度にどつと笑ふ。梶原由なき事ども申出してけりと赤面せり。

判官は抑、景時が義經を向様は猪鹿に喩ふる條こそ奇怪なれ。若黨ども景時取つて引落せ。」と宣へば、伊勢三郎義盛、片岡八郎武藏坊辨慶等判官の前に進出で、既に取つて引張るべき氣色なり。景時之を見て、軍談議に兵どもが所存を陳ぶるは常の習善き議には同じ悪しきをば棄て、如何にも身を全うして、平家を亡ぼすべき謀を申す景時に恥を與へ

んと宣へば、還つて殿は鎌倉殿の御爲には不忠の人なり。但し年頃は主は一人、今日又主の出で來ける不思議さよ」とて矢さしくはせて判官に向ふ。子息景季、景高、景茂續いて進む。判官腹を立てて、太刀を取つて向ふ所を、三浦別當義澄判官を抱き止め、畠山庄司次郎重忠、梶原を抱いて動かさず。土肥次郎實平は源太を抱き、多々良五郎能春は平次を懷く。各申しけるは、此の條互に穩便ならず。友諒ひ其の詮なし。平家の洩聞かんもをこがましく、又鎌倉殿の聞召されんも其の憚あるべし。當座の興言苦しみあるべからず。と申しければ、判官誠にと思ひて靜まれば、梶原も勝つに乘るに及ばず。此の意趣を結びてぞ、判官終に梶原には彌

讒せられける。

判官は、都を出でし時も申ししやうに、少しも命惜しと思はん人々は、是より上り給へ。敵に組んで死なんと思はん人々は、義經に附け。と宣へば、畠山庄司次郎重忠、和田小太郎義盛、熊谷次郎直實、平山武者所季重、澁谷庄司重國、子息右馬允重助、土肥次郎實平、子息彌太郎遠平、佐々木四郎高綱、金子十郎家忠、伊勢三郎義盛、渡邊源五馬允、昵鎌田藤次光政、奥州の佐藤三郎兵衛繼信、其の弟に四郎兵衛忠信、片岡八郎爲春、武藏坊辨慶等は判官に附く。梶原は逆艦の事に恨を含み、判官に付き、軍せん事面目なしと思ひければ、引分れて三河守範頼に付き、長門國へ向ひけり。

(源平盛衰記)



二一 詩人西行

指折り數ふれば殆ど二十年、余輩のなほ郷里の學校にありしや、會友人と古人を論ず。友人の曰く、「西行世を遁れて風月に放浪すと稱す、さはいへ後の藤原藤房の如く、いさぎよく跡を山林に晦ましもせず、吟詠贈答、更に俗塵に出入す、これ眞の厭世解脱の人にあらず、惜しむべし」と。然り、當時文覺上人が罵りて、「遁世の身とならば、一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄をたてて、こゝかしこに嘯きありく條、憎き法師なり。いつくにても見あひたらば、頭を打ちわるべき由、言ひしも、またこの故なり。されど、西行を以て

虚淡寂靜の出家、大信仰ありて、精力熾盛なる高僧に擬するは、固より非なり。渠は僧侶といはんよりは、詩人なり。欺騙は良心を蝕し、習慣は個性を縛し、嘔吐すべき諂諛、繁縛なる虚禮、滔々として社會はこれがために麻痺し、倫道頹廢し、人心腐爛す。かくの如きは、巧言令色直情徑行の西行が堪ふるどころにあらず。渠は現實界を厭うて空想界に遊ばんとす。その好むところ吟詠にあるはいふに及ばずといへども、當時未だ和歌を以て専門の職業とするものあらず。これありといへども、それは家傳歌學の沙汰喧しき門閥に限れり。その他は公卿殿上人が消閑の遊戯とし、花鳥風月の使とし、道具たるのみ。習慣の惰力はこの境をも制肘して、直ちに自然

の化に浴するもの極めて稀なり。西行にとりては、和歌は遊戯文字にあらず。さりとして、また門閥の下に屈從するに堪へず。望むところは、擅に山川花月に對して、おのが感情を逃べんとするにあり。平安の末造未だかくの如き歌人あらず。社會の情態は未だこの種の文藝の士の存在を許さず。乃ち西行は最もこの生活を爲すに近き法師の境界を選びしものにあらざるか。敢へて意識してこれを選びしとはいはず。その天稟の傾向はおのづからこゝに至らしめたるなり。

さりとして西行はただ名を僧籍に列して、實は崇佛の念篤からずといふにあらず。累代の武人、早くも俗界の纏綿を

厭ひ、人生の無常を觀じて、兵仗を擲ち、後世の勤めにまた餘念もなかりしなり。しかれども、渠もと多情多恨の資、壯年の時その女子が危篤の由を聞きて、顔色少しも變ぜざりきといふは、意志の力を以て強ひてその情を抑へたるのみ。その徳大寺の一家に對する逸話の如き、老年に至りても、感情一遍の性の更まらざりしを證するにあらずや。己は力めて佛道に精進し、修練苦行、眞如の月を見んとし、また屢人に勸めて、混濁の世を棄てて、出家の身とならしむ。かの公衡中將を勸めしが如き、即ちその一にして、其の他侍従大納言成通、中院右大臣雅定等を勸めしこと、また山家集に見ゆ。されど勸めし人みづからも迷悟の境にさまよひて、安心決

定の妙境じやうじやうに到着すること能はず。迷へりといふ人に答へて、

世を捨てぬ心のうちに闇こめて、

迷はんことは君ひとりかは。

といひ、また道に入りたればといふ人に、

たのもしき道には入りてゆきしかど、

わが身をつめば如何とぞ思ふ。

といへり。されば西行を目するに、身心ともに遠く俗界を

離れて、佛陀の位に到れる高僧とするは非にして、渠は汚衣・

破草鞋のうち、終に情熱を消すこと能はざりし人間なり。

憂き世の中とこの社會を厭ひこそすれ、全くこれを超脱す

ること能はず。悲喜哀樂ともに世人に同情せずんばやま

ず。また世人より同情を求めずんばやまざるなり。かく

て一度は飄然社交を絶つて、跡を山林に潜め、また遠遊の途

に上るといへども、稍久しくは寂寥の感に堪へず。得

たる詠草を携へて更に舊里に歸る。

吉野山やがて出でじと思ふ身を

花散りなばと人や待つらむ。

と言ひながら、この山に籠りも果てざりしを、食言の徒なり

と、後世の偏狭なる道學者流が非難するも、これがためなり。

四國より同行の僧が先だつて還りしを見送りて、

還りゆく人の心を思ふにも、

吉野山に  
入つて、その  
ま、おまじし  
あつたのよし  
なうは  
世の中の  
は得つてある  
であることか。

はなれがたきは都なりけり。  
 といへるもの、みづからも亦望郷の念抑へても抑へがたかりしなるべし。かくの如き天性、即ちこれ西行をして、教界の高僧たらしめずして、歌壇の名家たらしめし所以にあらずや。

(藤岡作太郎)

二二 晩春の別離

時は暮れ行く春よりぞ  
 また短きはなかるらん。  
 恨は友の別れより  
 さらに長きはなかるらん。

君を送りて、花近き  
 高樓までもきて見れば、  
 緑に迷ふ鶯は  
 霞空しく鳴きかへり、

白き光は佐保姫の  
 春の車駕を照らすかな。

いかにすぐれし想をか  
 沈める波に湛ふらん。

これより君は行く雲と  
 ともに都を立ちいでて、  
 懐へば琵琶の湖の  
 岸の光にまよふとき、  
 東伊吹の山高く  
 西には比叡・比良の雪、  
 日は行き通ふ山々の  
 深きながめをふしあふぎ、

流は空し法皇の  
 夢杳かなる鴨の水、  
 水にうつろふ山城の  
 みやびの都、行く春の  
 霞めるすがた見つくして、  
 畿内に迫る伊賀伊勢の  
 鈴鹿の山の波遠く  
 海に落つるを望むとき、

いかに萬の恨をば  
空行く鶯に窮むらん。

春去り行かば青によし

奈良の都に尋ね入り、

としつき君が戀ひ慕ふ

御堂のうちに遊ぶとき、

古き藝術の花の香の

伽藍の壁に遣りなば

いかに韻を身にじめて、

深き思に沈むらん。

さては秋津の島が根の

南の翼紀の國を

回りて進む黒潮の

鳴門に落ちて行くところ、

天際遠く白き日の

光を泄らす雲裂けて、

目にはるかなる遠海の

波の躍るを望むとき、

いかに胸うつ音高く

君が血汐のさわぐらん。

遠き昔を忍ぶらん。

げにやみやびを戀ひ慕ふ

君にしあれば、君がため

藝術の天に懸かる日も、

時を導く星影も、

何れ行くへを照らしつゝ

深き光を示すらん。

さらば名残はつきずとも、

袂を別つ夕まぐれ、

または名に負ふ歌枕、

波に千とせの色映る

明石の浦のあさぼらけ、

松萬代の音に響く

舞子の濱のゆふまぐれ、

もしそれ海の雲落ちて、

淡路の島の影暗く、

狭霧のうちに鳴き通ふ

千鳥の聲を聞くときは、

いかに浦邊にさすらひて

見よ、影深き欄干に  
 煙をふくむ藤の花  
 北行く雁は大空の  
 霞に沈み鳴き歸り、  
 彩なす雲も愁ひつゝ  
 君を送るに似たりけり。

あゝ、いつかまた相逢うて、

もとの契をあたゝめん。  
 梅も櫻も散りはてて、  
 すでに柳はふかみどり、  
 人はあかねど行く春を  
 いつまでこゝに停むべき。  
 われに惜しむな家づとの  
 一枝の筆の花の色香を。

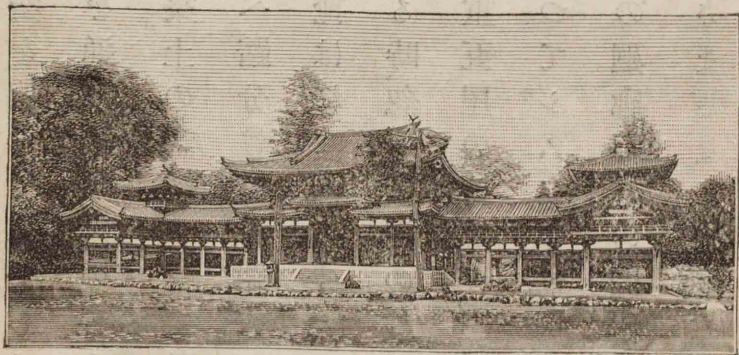
(島崎藤村)

二三 鳳凰堂

四月の末、舊曆十日ばかりの月の光が、そろ／＼と落日の

Symmetrical

空を明るくしかける黄昏の折であつた。細長い宇治の町  
 を通り抜け、縣の森の少し先を北に曲つて、平等院の東側の  
 築土の盡くるところから、こんもりした青葉の徑を更に左  
 へ踏分けると、路がだん／＼下り坂になつて、宇治川の堤に  
 掩はれて居る平たい窪地の緑蔭の底へ潜つて行かうとす  
 る時、忽ち密樹の枝を透かして、下の方から鳳凰を戴いた二  
 重瓦屋の搏風が、ちら／＼隠見し始める。坂を全く降り切  
 つてシムメトリカルな堂の正面に迂回してしまふ迄、左右  
 の廻廊の柱の間隔や檐の角度が、一步々々に變化し、絶えず  
 さまざまの優雅な態度を示してくれる。運動の關係を逆  
 にして考へれば、堂が中央に舞を舞つて居るやうなもので、



鳳 面へ來れば、堂は次第に寫眞で見  
 通りの端嚴均齊な姿勢を保ち、落着  
 いた相を現ずる。藤原時代の榮え  
 堂に誇りと威嚴とを、重々しい線の力  
 に罩めて曲折高低の勢を作つて居  
 る建築の立派さは、まことに驚嘆せ  
 ざるを得ない。

夕闇の池の面は、腐つた水が濺んで居ながら寧ろ硝子を  
 張つてあるやうに冷たく堅く平たく見える。大理石の廊  
 下へ物象の映るぐらゐの鮮かさに堂の影が倒さまに映じ  
 て居る。

八百年の星霜を経て生存の力の稀薄に成つた建物が、水  
 面に泛ぶ影と共に平安朝の幻の如く立ち現れて、暫く虚空  
 に樓閣を描き、私があよいと眼を閉つて居る間に消えてし  
 まふかと危まれる。大方夕暮の月の光と日の光とが互に  
 融け合つて、神秘的な色彩を堂の周圍にひたし、と漂はせて  
 居るせいであらう。深い木立の隙までもぼんやりと薄明  
 るく見えて、葦の鳳凰が眞黒に聳えて居る後の空は、丁度十

四五年前流行した石版畫のやうな青味を帯び、晝と夜とが刻々に領分を争ひ續けてゐた。鳳凰堂はいつ行つても見られるかも知れない。併し天地が幽玄な羅衣を被つて、夢の世界のやうな現象を呈して居る一瞬間に、私の頭へ刻まれた第一印象は、當分忘れまいと思ふ。

(谷崎潤一郎)

國文新讀本 卷六 終

広嶋丹立三次中学校カネ子級

高橋百樹

大正十四年十月十三日印  
 大正十一年十月十六日訂正  
 大正十二年八月二十日訂正  
 發行行

國文新讀本
卷一 各金四拾三錢
卷二 各金四拾三錢
卷三 各金四拾三錢
卷四 各金四拾三錢
卷五 各金四拾三錢
卷六 各金四拾三錢
卷七 各金四拾三錢

大正十四年度臨時
卷一 各金七拾七錢
卷二 各金七拾七錢
卷三 各金七拾七錢
卷四 各金七拾七錢
卷五 各金七拾七錢
卷六 各金七拾七錢
卷七 各金七拾七錢



編者 藤村 作  
 編者 島津 久基  
 發行者 佐藤 幹枝  
 印刷者 高橋 郁

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地  
 東京市京橋區弓町二十五番地

發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地  
振替口座東京二九五〇七番

至文堂

弊堂發行の教科書は供給差支無き様常に澤山製本候來準備致居出問若し各地書店に品切れ等にて御差支有之候節は何卒弊堂へ直接御注文或下度左すれば直に送本可申上候



